

第 V 章 電気通信事情

1. 主管庁

1.1 組織・人員

電信・電話については郵便とともに郵電省 (Ministere des Postes et Telecommunications) が主管している。郵電省は 1967 年 5 月 1 日に公共土木省 (Ministere des Travaux Publics) の局から分離昇格して発足した。しかし、発足以来専任の大臣は任命されず、公共土木省の大臣の兼任するところとなっている。郵電省の組織図は第 V-1 図に示すとおりである。

現在は次官もまた空席であり、省内は総局長 (Directeur des Bureaux) であるウム・シム氏 (Um Sim) によって切りまわされている。ウム・シム氏は技術者で以前はインスペクターの閑職にあつたが、省の発足とともに総局長になつた人で、アメリカに留学の経験もあり、1968 年東京で開催されたマイクロウェーブ・セミナーに出席している。

総局長とはほぼ同等の人としては官房長、インスペクターがいて、総局長の下に次長および建築、庶務等の 7 局と倉庫が所属している。局というのは Bureau を訳しているが、これは組織図を見ても Bureau 以外の言葉が出て来ないためであり、日本の規模でいえば課あるいは係といつてもよい場合が多くあるようである。

現業部門は Service といつて総局長の下に属し、郵便・国内通信・国際通信の 3 部門に分れている。これらの現業部門を統制する Direction des Bureaux という機構が組織図にあるが、実際には人はいない。郵便サービス部門は 5 部に、国内通信サービス部門は 8 部に、国際通信サービス部門は 7 部分れている。

国内通信サービス部門の 8 部は、電信、搬送、建設、無線、管理および 3 つの電話部門である。電話についてはブノンベン地区、ブノンベンの近郊を主としてカンダル州およびそれ以外の電話と地域別に 3 つに分けられている。

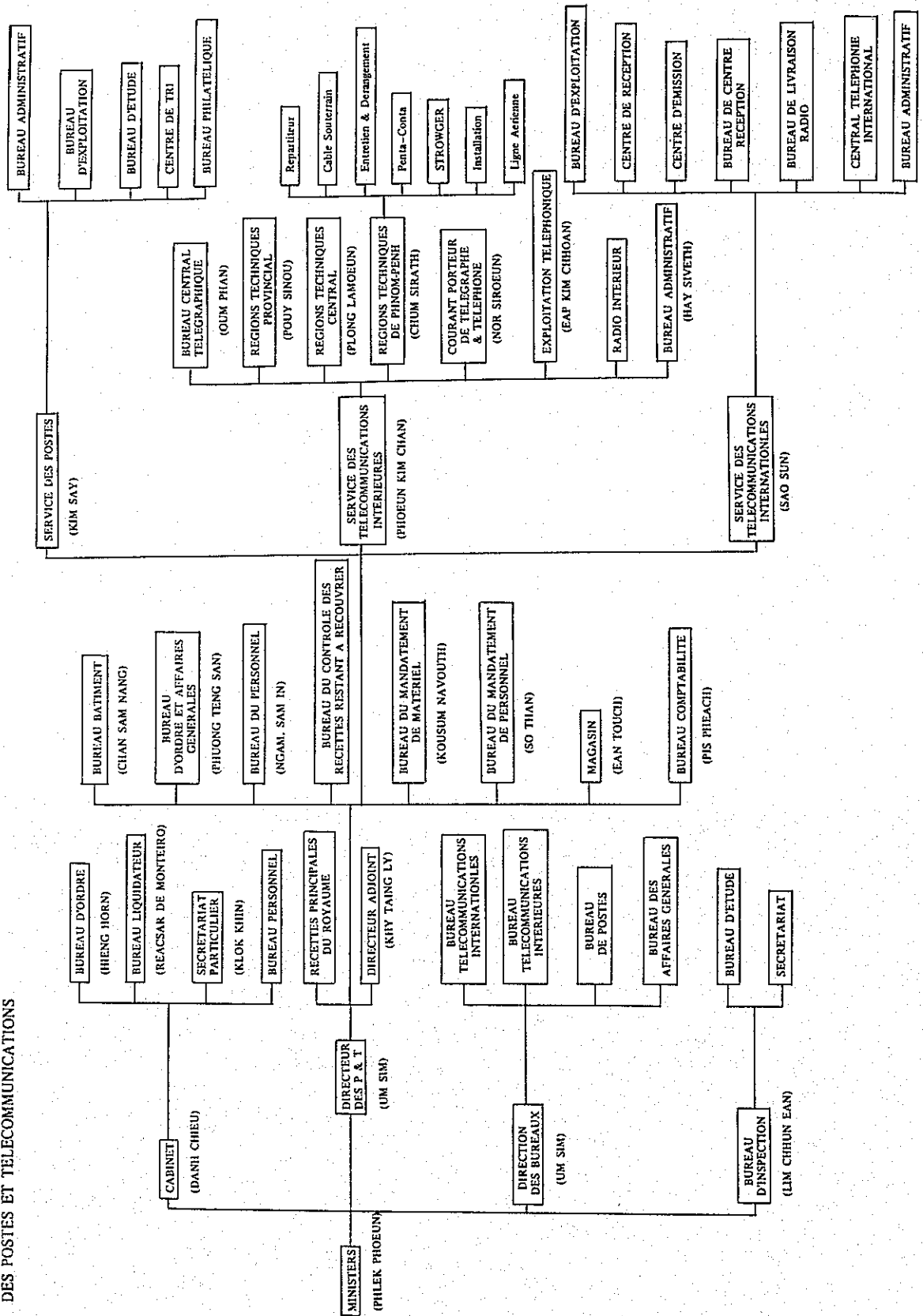
国際通信サービス部門は、建設、受信所、送信所、中央局、電信配達、ボードスおよび管理の 7 部からなっている。

また、全国には 158 の郵電局 (Bureaux des P & T) があつて現業を担当している。

組織は上記のように形式的には整然としていても、実際には個人によつて左右されることが大きいようで、個人プレイが目立つ。例えば今回の調査団の相手をしてくれたのはすべて総局長の Um Sim 氏であり、国内通信サービス部門の長であるブン・キン・チャン (Phoem Kim Chan) 氏も最後の中間報告会に顔を出したにすぎず、他の人にかたつては調査に来ていることすら知らない状態である。従つて、一旦総局長が交替すると全く違つた方針がうち出され、凡ゆる部門の人の入替が行なわれることになり、それまでの努力

第 V - I 図 郵便省の組織

ORGANIGRAMME DU MINISTRE
DES POSTES ET TELECOMMUNICATIONS



が水の泡となることもあるのではないかとと思われる。エンジニアの資格は総局長ウム・シム氏、同次長キー・タン・リー氏、国際通信サービス部門の長サオ・スーン氏、ブノンベン地区の電話部門の長ロン・ラムーン氏の5人しか持っていないということである。

郵電省の人員は1968年12月末で1,200名であり、常備は581名で他は日傭いである。日傭いといつても5年、10年と勤務していて、現業部門はこれらの人によつて運用されている。総局長の話によると、郵便、国内通信、国際通信に従事している人はそれぞれ全体の40, 30, 30%程度ということである。1967年にくらべると1年で47人増加しているが、常傭いについては4人減少しているとのことであり、優秀な人にとつてあまり魅力のある職場でなく、採用に苦心するという総局長の話であつた。

現在の国内無線はPhnom PenhからKratie, Stung Treng, SiemreapおよびSiemreapからPh. Tbeng Mean CheyおよびSihanoukvilleからKhemarak Phouminvilleへの短波回線を持つにすぎず、本省の国内無線部といつても部長もおらず、2名が所属するにすぎない。もし無線部門が拡張される場合には保守員の養成訓練もかなり力を入れる必要がある。

初めに述べたように、郵電省はカンボディアにおける電気通信の主管庁であるが、放送については1965年から情報省に移管され今日にいたっている。また軍隊と警察用の無線局は機密となつており、郵電省の管轄下にはない。

周波数の割り当てに当てにあつては、郵電省は軍隊、警察との三者による周波数割当委員会を開催し、合意に達したものに許可を与えている。郵政省からは総局長が出席し、必要に応じて国際周波数登録を担当している国際通信部門の長がオブザーバーとして出席する。委員会は軍隊、警察の要求に基づき既設局に対しても周波数変更を命ずることがある。しかし法律は整つておらず、日本の電波法、放送法に相当する法律もない。したがつて申請書の様式などもきまつていない。

郵電省、情報省の無線局のほか、航空用無線局としてPhnom PenhのPochentong空港に118.1 MCと119.7 MCの局があるが、国際的に緊急波と定められている121.5 MCの備えはない。そのほか、VOR(114.3 MC)、IDB(351 KC)、9 GC帯気象レーダー等の設備がある。また、Siemreap, Saigon, Bangkok, Vientiane, Singapore, Hanoi, Cantonとの間に短波固定回線を結んでいる。

官庁に属しない一般無線局はごくわずかで、私営バス、ゴム園などがHF帯、漁業関係でVHF帯を使つているに過ぎない。しかし、この国唯一の多目的ダムPrek Thnotダムの建設に着手した日本の前田建設KKが、工事現場とPhnom Penhとの間に150 MC帯5CH多重回線を申請しており、近く許可を与えるとのことであつた。

カンボディアでは、アマチュア無線局の開設は認められていない。このように数えていくと、国内の無線局の数は、軍隊、警察を除けば、多く見積もつても100局には達しないであらう。

1.2 予 算

国家予算の中で郵電省の予算は1%程度にすぎないといわれるが、財政省から財政関係の資料を入手出来ずよくわからない。一例として1967年の予算を電気通信専門家から入手したものを第V-1表に示す。

第V-1表 国 家 予 算 (1967年1月~12月)

(1リエル=6円50銭)

1. 国 会	27,642,800リエル
2. 枢 密 院	6,664,000
3. 首 相	71,685,000
4. 労働および社会福祉省	29,175,000
5. 計 画 省	16,832,000
6. 産 業 省	5,684,000
7. 郵 電 省	71,348,682
8. 外 務 省	142,537,000
9. 内 務 省	126,099,800
10. 国家保安省	37,227,200
11. 情 報 省	55,130,000
12. 教 育 省	1,445,953,000
13. 通 産 省	9,988,500
14. 農 業 省	244,416,146
15. 法 務 省	45,802,080
16. 宗 教 省	18,698,570
17. 厚 生 省	359,872,000
18. 公共土木省	234,828,000
19. 大 蔵 省	1,781,725,930
20. 国 防 省	1,619,645,292

合 計 6,686,000,000リエル

(参考1966年: 7,056,000,000リエル)

この内 物品費 2,707,733,102リエル(40%)
 人件費(職員・教官等) 3,978,266,898リエル(60%)
 (52,176人分)

郵電省の収入、支出を第V-2表に示す。電気通信のみを考えるとつと大きい黒字になるということであるが、これも資料が得られず、どの程度のものであるかはつきりしなかったが、おおよその分類を第V-3表に示す。

第V-2表 郵電省収支

単位：リエル

年	収 入	支 出	合 計
1961	72,280,788	69,388,102	2,892,686
1962	67,349,287	58,685,817	8,663,470
1963	77,342,026	67,368,126	9,973,900
1964	80,363,411	103,003,779	-22,640,368
1965	91,164,318	79,131,364	12,032,954
1966	76,027,168	123,010,931	-47,837,469
1967	92,875,803	72,487,343	20,388,460
1968	99,900,033	82,053,127	17,846,906

第V-3表 1968・1967年の収支内容

収入の部

種 類	1968	1967
郵便	19,332,990	17,785,912
国内電報	2,540,631	2,571,518
国際電報	38,512,725	39,326,936
国内電話	31,637,165	25,779,139
国際電話	4,109,145	2,755,451
雑収入	533,491	544,909
国際勘定	3,233,882	4,111,935
計	99,900,029	92,875,800

支出の部

種 類	1968	1967
郵便輸送	8,000,000	4,248,258
物品費	33,519,752	28,446,242
人件費	40,533,374	39,792,841
計	82,053,126	72,487,341

建設投資は支出の中のMaterialからなされているが、大した額でもなさそうであり、1968年度の内容は第V-4表のとおりである。調査団にとって不可解であったのは予算の成立と執行であり、郵電省がどのような計画をもっていて財政省と交渉して予算をとり、どのように計画を実現させているかについて、何回も質問したが、その答はあいまいであり、さっぱり要領を得なかつた。毎年の投資は裸線のほりかえにいたるまですべてUm Sim総局長の独断により決められている模様であり、詳細な長期の計画性を持っていないように見えた。ただし、今後の拡張計画の中心となるべき案については持つており、本章5節で紹介するから参照されたい。

第V-4表 1968年の建設工事

1. 国内通信

- A) 架空線路 95 km (回線距離)
0.95% (前年比) の増加
- B) ケーブル 520 km (回線距離)
- C) 交換機
設置 (磁石4台, 自動10台)
修理 (卓上型4台, 磁石4台, 自動9台)
- D) 加入者増設等
局線電話 531 前年比 16.13% の増加
内線電話 110 " 3.66% "
場所変更 13,930
- E) 無線
i) プノンベンおよびクラチエにダブルット空中線建設
ii) カンブール送信所でダブルット空中線1面張替
- F) その他
i) プノンベンで2,000加入(ストロージャ型)の電話機のペンタコンタへの移設
ii) P & T局舎の移設
KG, KdeyおよびStung Treng

2. 国際通信

- A) その他
i) プノンベンとバリの間の無線電話臨時運用
ii) プノンベンと東京間の写真伝送
iii) プノンベンと香港間の無線電話1回線増
iv) シアヌークビル海岸局の開始(註: 現実には建物だけであった。)
v) 専用線(電信)の設置 プノンベンとバリ1回線, プノンベンとバリ3回線
vi) カンブール送信所にロンビク空中線4面設置
vii) 電信回線の臨時運用(対大阪, 香港, 上海)
viii) A R Qの設置
ix) プレクトノットダム国際会議のための音声設備
x) ボーシェントン受信所への商用電源引込
xi) カンブール送信所の300kVA発電の調整
xii) コンボンセイラの国王別荘の発電機の保守
xiii) カンブール送信所の30kW送信機2台の調整

3. 建築

- i) A R Qの設置に伴う付帯工事
ii) バッタンプンの交換機収容局舎新設
iii) シアヌークビル海岸局舎の新設

1.3 統計

統計としては月報および年報に記載されているもののほか、トラヒック関係としても毎月の数字が発表されていて、その1例を第V-5表に示す。この表には、局名、加入者数としてPBXの数、電話機の加入数、内線電話機数、電話統計として市内電話呼数、市外通話の発信呼数、着信呼数、中継呼数および収入料金、電報統計として通数、語数、収入料金が記入されており、当該月の2ヵ月後に発表されるようである。電話呼数については、多くの無料電話（軍隊の通信あるいは交換手が頼まれて接続するもの等）が交換証を書かずに接続されているとのことで、あまり信頼性がないとのことである。

月報・年報は同じような内容であり、1968年の年報を参考-V-1に示す。年報は郵便、国内通信、国際通信、建築、人員、監査、各種の活動、財政、計画という項目に分かれ、簡潔にその年の活動状況を説明している。

第V-5表 ROYAUME DU CAMBODGE

DIRECTION DES POSTES ET TELECOMMUNICATIONS ETAT STATISTIQUE
des communications télégraphiques et téléphoniques intérieures effectuées pendant le mois de NOVEMBRE 1969

	Nombre des abonnés			Cions téléphoniques					Cions télégraphiques		
	STD	PP	PS	Urb.	Int.Ur.	Montant	Arriv.	Trans	Téleq. Mots	Montant	
Phnom-Penh	225	3,191	3,096	477,622	18,804	1,627,449	13,754	1,941	960	21,121	152,046.80
Phnom-Penh 1	1	6	-	-	108	2,157	-	-	106	1,824	5,086.-
Angkason	1	32	-	1	132	1,851	204	107	25	310	1,005.-
Banam	1	4	2	-	195	1,992	185	154	6	72	240.-
Bassat	1	4	-	-	123	2,302	159	947	20	348	1,116.-
Battambang	13	118	20	9	1,665	58,708	2,233	347	194	4,247	14,691.20
Bokor	2	11	3	-	218	4,435	297	-	-	-	-
Chak-Angré	1	46	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Chbar-Ampeou	1	11	-	-	321	2,388	380	-	15	187	669.-
Chhlong	1	3	-	-	24	240	13	-	24	811	1,065.-
Kampot	2	64	-	1,847	1,847	45,497	1,796	921	62	1,526	4,770.-
Kas-Thom	1	2	-	-	177	2,680	53	230	7	137	435.-
Kep	1	20	-	-	363	7,930	322	-	25	648	2,274.-
Kirirom	2	22	1	-	946	18,289	512	-	6	311	1,195.-
Koki	1	3	-	-	139	1,722	292	6	5	88	276.-
Kg-Cham	13	116	103	7,799	4,328	196,013	3,502	2,679	135	2,894	10,145.10
Kg-Chen	1	5	-	-	70	1,158	75	132	4	69	216.-
Kg-Chhnang	2	42	2	-	525	12,139	593	12	64	1,600	5,754.90
Kg-Kantuet	1	3	-	-	123	1,302	110	72	-	-	-
Kg-Kdoloy	1	2	-	-	28	659	58	135	9	118	408.-
Kg-Luoung	1	12	1	-	177	3,564	223	-	12	120	486.-
Kg-Speu	5	36	-	35	1,249	23,966	1,419	1,284	43	1,206	3,790.-
Kg-Thom	5	39	6	-	796	19,736	678	38	60	1,584	5,524.30
Kg-Trabec	1	7	3	-	207	3,332	167	-	9	147	468
Kg-Tracht	1	13	-	-	227	4,352	231	-	10	102	392
Krakor	1	6	-	-	244	7,341	359	115	10	310	996.75
Kraulé	1	28	-	-	300	7,481	152	-	118	2,538	9,752.00
Krauchmar	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Mimot	3	10	-	-	601	15,067	543	173	38	639	2,175.40
Mongkolborey	1	3	-	-	85	1,597	121	-	21	301	966.-
Msang	1	11	-	-	219	7,910	268	206	4	67	218.-
Nouk-Loung	1	18	-	-	506	8,154	535	540	11	127	417.-
Pailin	1	13	-	-	135	3,975	104	-	17	334	1,143.-
Polpot	1	4	-	-	210	4,928	228	-	4	134	747.-
Prékak	1	13	-	-	61	835	66	-	10	120	447.-
Prey-Veng	1	20	-	104	1,118	17,093	1,032	9	48	1,632	5,249.-
Pursat	2	39	2	-	408	7,892	16,016	689	72	1,623	5,162.-
Siemreap-Angk	4	71	102	-	7,892	1,942	72,743	2,608	17	136	3,411
Siemreap-Ville	3	78	107	6,251	2,937	136,677	2,587	-	120	2,908	12,040.-
Sisophon	1	18	-	-	246	4,570	186	400	13	199	675.-
Skoun	1	9	-	-	191	3,764	190	91	18	268	873.-
Snoul	1	9	-	21	210	4,632	178	122	14	199	693.-
Sré-Umbell	2	4	2	-	61	216	67	-	9	22	69.-
Suang-Treng	2	17	-	157	-	-	-	-	81	1,744	6,023.-
Suang	1	12	-	-	953	19,224	1,260	10	12	196	627.-
Svay-Rieng	2	35	10	49	1,064	29,393	981	-	87	1,646	5,334.-
Taing-Kauk	1	2	-	-	186	1,344	139	84	7	93	300.-
Tukeo	1	42	-	70	991	18,987	918	128	61	1,159	2,555.-
Takhmau	5	44	12	2,833	1,366	16,574	1,549	63	31	560	3,351.25
Tnmar-Kaul	2	2	3	-	54	1,070	66	3	4	90	368.-
Thagl-Totung	2	6	25	-	254	3,110	550	7	6	102	408.-
Tonleap	1	5	-	-	55	1,227	70	-	8	103	342.-
Tonleubet	1	20	-	2	506	6,393	861	-	4	3	43
Trankhuar	1	4	-	-	115	2,232	88	-	3	43	138.-
Veal-Iteuh	1	2	-	-	48	1,080	93	112	4	52	171.-
TOTAUX	331	4,372	3,621	505,100	48,210	2,459,092	48,888	11,221	2,769	59,832	235,041.75

PHNOM-PENH, LE 2 JANVIER 1970
P. LE DIRECTEUR DES P & T,
Le Chef du Bureau E. T.,

IEP KIM CHHOAN
Contrôleur des

2. 国内通信

2.1 電 話

2.1.1 局数、電話機数

1969年11月末現在で電話局数54、加入電話数4,372、総電話機数7,993である。人口は約700万人であるから、100人当りの電話機数0.1と信じられないぐらい低い数字である。

自動交換機のある都市は次のとおりである。

プノンベン局	4,000 端子	1961年 1月開局
シアヌークビル局	1,000 端子	1968年 1月開局
コンボン・チャム局	200 端子	1964年 11月開局
シェムリアップ局	200 端子	同 上
カンボット局	200 端子	同 上
バタンバン局	1,000 端子	(工事中)

プノンベン局はフランスCGCTのペンタコンタであり、それ以外は沖電気のA型交換機である。バタンバン局の交換機は最初2,000端子で、プノンベンに設置されたもので、ペンタコンタとの接続上の問題からプノンベンでの運用を止めてバタンバンに移設工事中であり、1970年6月にはサービス開始の予定である。

その他はすべて磁石式交換機である。

2.1.2 市外伝送路

裸線と裸線搬送により構成され、1969年10月末現在で次のとおりである。

市外回線延距離	10,256 km
直通回線	21回線
オムニバス回線	76回線
兼送回線	23回線

Phnom Penhを中心とした市外回線網は第V-2図の如くである。

裸線搬送装置は沖電気製で、Phnom Penhから下記の対地間に使用されているが、最初開通したのは1964年10月であった。

1CH装置	3ルート (Siemreap, Svay Rieng, KG. Speu)
3CH装置	2ルート (Kampot, Siemreap (工事中))
12CH装置	3ルート (KG. Cham 6CH, Sihanoukville 8CH Battambang 8CH, CH数は実装数を示す。)

Phnom PenhとBattambang間の12CH装置は45年2月末に開通したもので、この間に従来使用していた3CH装置をPhnom PenhとSiemreap間に使用すべく工事中とのことである。

1967年と1968年の市外通話度数は次のとおりであった。

1968年	482,879度	(137%)
1967年	352,725度	(100%)

市外通話はすべて待時で行なわれており、Phnom Penh局の手動交換台(フランス製)は12台(24座席)あり、案内と受付に各2台、通話用に8台使用されている。日本製の手動交換台は交換機のBattambangへの移設に伴ない交換室内に放置されている。この交換室は現在でも狭いため、市外回線の拡張に応じて自動即時方式を導入して手動交換台をあまり多く増やさぬ方がよいと考えられる。

日本製交換機を備えている局では、日本製の手動交換台を使用している。

2.2 電 信

電報通数は1967年が44,447通であり、1968年が43,456通と少し減っている。

電信回線数は1968年12月末現在で次のとおりである。

直通回線	15回線
オムニバス回線	35回線
印刷回線	1回線
短波回線	3回線

印刷回線は日本政府からテレプリンタ3対向が寄付されたため、近く4回線に増えるがこれ以外はモールス符号を使用するものである。

3. 国際通信

3.1 電 話

対地は上海、香港、パリ、東京の4地であり、通話の統計は次のとおりである。

1968年	発信	8,155度, 49,793分
	着信	4,494度, 24,125分

1967年 発信 5,714度, 31,840分
着信 3,111度, 17,556分

通話先は発信信とも香港, シンガポール, フランス, 日本で95%以上を占めている。

3.2 電 信

対地は香港, バリ, 大阪, サイゴン, 上海, ビエンチャン, 北京およびハノイの8カ所であり, 電報通数は次のとおりである。

1968年 発信 92,972通
着信 92,790通
1967年 発信 84,999通
着信 79,814通

3.3 設 備

国際通信はすべて短波を利用しており, 送信所はカンブール (Kambaul) に, 受信所はポーショントン (Pochentong) に, 中央局はP & Tの局舎内におかれている。

送信所の設備は次のとおりである。

20 kw 送信機	3台 (国際電気製)	F ₁ , SSB
30 kw 送信機	2台 (フランス製)	F ₁ , SSB
2 kw 送信機	3台 (フランス製)	A ₁ , F ₁
発動発電機	5台 (125 kVA × 2, 300 kVA × 3)	

受信所の設備は次のとおりである。

電話受信機	2台 (国際電気製)
電信受信機	1台 (フランス製, オールトランジスタ)
	4台 (フランス製)

中央局にはボードス装置, 国際交換台, テレプリンター等が設置されている。中央局と受信所間の連絡線に400MHzの無線装置 (国際電気製, 24回線容量12回線実装) を使用し, 予備として有線ケーブルを持ち, 中央局と送信所間の連絡線は受信所経由であり, 受信所と送信所の間は裸線である。

送受信設備数が少ないために, 電話, 電信ともに対地ごとに時間を決めて時間運用をしている。

設備も古いものが多い。国際通信の専門家としてKDDから3人の人がカンボディアで指導に当たっているが, 設備が古いのに保守費が少ないことおよび定期点検をしないことを嘆いていた。

4. 料 金

電話を新設する場合の料金は次のとおりである。単位はリエル (1リエルは6円50銭) で示す。

加入料	加入数200以上の場合	3,500
	加入数200未満の場合	2,000
工事料	単独加入の場合	全額加入者負担
	他と共同の場合	工事の25%負担
分岐電話加入料	加入数200以上	2,000
	加入数200未満	1,200
同上工事料	全額加入者負担	
内線電話の取付	全額加入者負担	
私企業との電話接続	検査およびそれに伴う検査料を加入者負担。	
臨時電話の架設	単独電話の加入料および工事料の半額を負担。 内線電話の場合は工事料の半額負担。	
船への架設	設置は無料。加入料は1日100リエル、ただし、最小加入料は200リエル。	
中継放送線	1日400リエル	

加入別の月額基本料金は次のとおりである。

加入別 賃貸料	200加入以上の局	200未満50以上	50未満
屋内線	10	10	10
単独電話	210	40	30
共同電話	110	25	20
内線電話	20	10	10
電話機	20	20	20
磁石交換台(1加入)	80	80	80
磁石交換台(内線)	50	50	50
自動交換機(1加入)	160	160	160
自動交換機(内線)	100	100	100
維持料			
屋内線	60	20	10
単独電話	60	20	10
共同電話	35	15	7
内線電話	15	12	10
電話機	10	10	10
磁石交換台(1加入)	40	40	40
磁石交換台(内線)	20	20	20
自動交換機(1加入)	80	80	80
自動交換機(内線)	40	40	40

市内通話料金は次のとおりである。

加入数200以上の場合

1日の通話数90以下は無料

90通話以上は1通話につき4リエル

加入数200未満50以上の場合

定額で月額160リエル

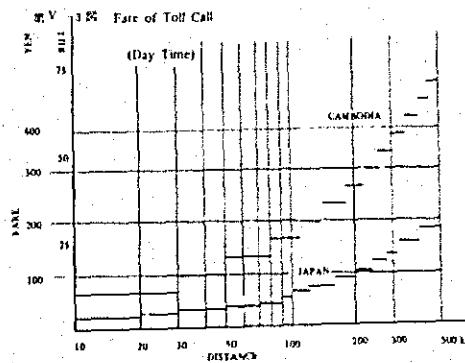
加入数50未満の場合

定額で月額80リエル

市外通話料は次のとおりである。

距離 (km)	昼	夜
10 km まで	5	10
10 以上 30 まで	10	20
30 以上 50 まで	15	30
50 以上 80 まで	20	40
80 以上 110 まで	25	50
110 以上 140 まで	30	60
140 以上 180 まで	35	70
180 以上 220 まで	40	80
220 以上 260 まで	45	90
260 以上 300 まで	50	100
300 以上 350 まで	55	110
350 以上 400 まで	60	120
400 以上 450 まで	65	130
450 以上 500 まで	70	140

上記のことについて日本と比較して図示すると第V-3図のとおりである。



距離は加入者の属する電話局間の直線距離を使用する。昼は7時から20時まで、夜は20時から翌朝7時までをいい、料金は3分単位である。

国際通話料の1例は次のとおりである。

対地	通話料3分	3分以上1分ごと	呼出しの付加料	予約通話料
日本	276	92	92	9.2
フランス	414	138	138	13.8

その他の料金は次のとおりである。

設置場所変更	工事、材料費全額加入者負担。 ただし、譲渡のものについては1,000リエル
料金請求書	12リエル
領収書の送付	3リエル
保証金の予託	加入者の通話度数によつて異なるが、少なくとも2,000リエル以上が必要で、使用料の滞納がある場合にはこの中から天引きされる。
電話番号簿	単独および共同電話の加入者に無料配付される。

国内電報料金は次のとおりである。

普通電報	1語につき3リエル ただし、10語までは30リエル
至急電報(公用)	普通電報と同じ
至急電報(私用) または為替電報	1語につき6リエル ただし10語までは60リエル
新聞普通電報	1語につき1リエル ただし、10語までは10リエル
新聞至急電報	1語につき3リエル ただし、10語までは30リエル

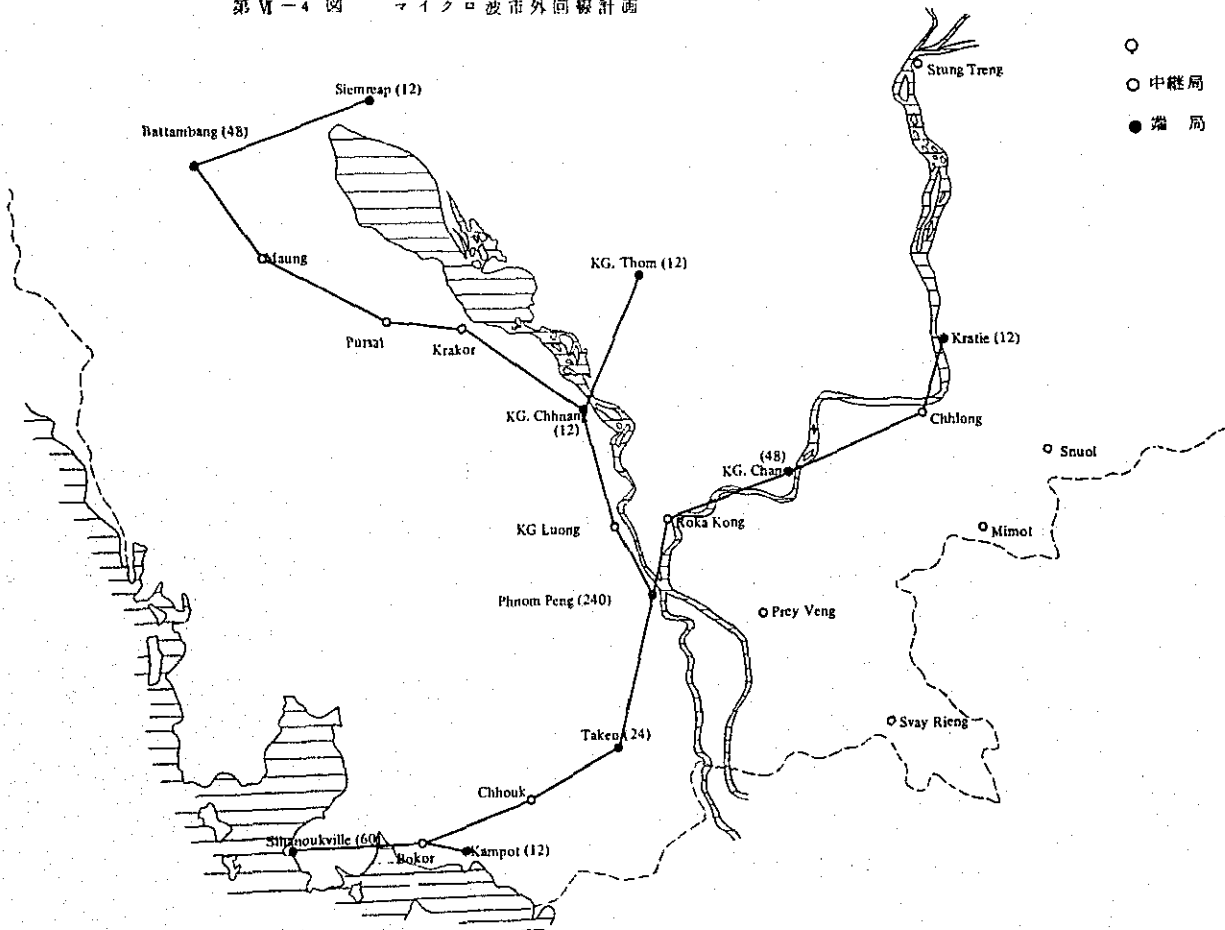
国際電報料金の1例は次のとおりである。何れも1語あたりの料金である。

日本	普通電報	13.22リエル
	至急電報	26.44リエル
	新聞普通電報	4.41リエル
	新聞至急電報	13.22リエル
	書信電報	6.61リエル
フランス	普通電報	15.12リエル
	至急電報	30.24リエル
	新聞普通電報	5.04リエル
	新聞至急電報	15.12リエル
	書信電報	7.56リエル

国内料金について日本と比較すれば、市内通話料金は約4倍、市外通話料金は約2～4倍、電報料金は約3倍という値段の高さである。例えば市内の1通話料金4リエルは、市内の交通機関であるシクロの1回の料金とほぼ同額であるから、シクロに乗って先方に出かける方が良いという人もいるわけである。これだけ高い料金をとるのは加入数が少なくコスト高であるためと思われるが、その割には便利であると認識されていないようであり、ともかく加入数を増やして便利であると利用者に認識させるのが先決であろう。

加入申込者の積滞について、総局長に事情を聞いてもはっきりした答は得られなかった。プノンベンの設備端子4,000に対して加入数3,191であるのに積滞が無いというのである。我々はそんな筈はないだろうと言ったのだが、申込みがないのだという。あきらめて申込みをしないというのが実状であるかも知れない。

第Ⅴ-4 図 マイクロ波市外回線計画



5. 郵電省の拡張計画

郵電省の拡張計画はカンボディア王国の第2次5カ年計画立案にともなつて何回か発表されているようであるが、何れも財政当局の認めるところとなつていない模様である。最新の案は1968年10月18日付で総局長ウム・ツム氏が大臣に提出したものであり、概要は下記のとおりである。この案も実現されるかどうかは、はつきりしないが、郵電省の考え方を示すものとして注目に値する。

拡張計画概要

期 間	全計画を今後7年ないし10年間に実現する。	
所要資金	外貨分	5.558千米ドル
	内貨分	58.350千リエル
	合 計	364.040千リエル
計画I	ブノンベン中央郵便局の拡張	
	外貨分	260千米ドル
	内貨分	15.700千リエル
計画II	国内電気通信	
1.	ブノンベン新中央電話局	
a 局舎	外貨分	200千米ドル
	内貨分	4,000千リエル
b 交換機	容量10,000端子, 実装4,000端子, トラヒック1,000端子 当り80アールン, 市外600回線収容	
	外貨分	640千米ドル
2.	ブノンベン加入者増設	
	加入者線10,000回線新設および旧局との中継線600回線新設	
	外貨分	970千米ドル
	内貨分	12,650千リエル
3.	ブノンベン現電話局	
	1,000加入増設	
	外貨分	330千米ドル
4.	マイクロ波市外回線	
	ルート図および収容回線は第V-4図に示す。	
	2GHzを使用	
	外貨分	1,484千米ドル
	(無線装置)	
		674千米ドル
	(搬送端局装置)	

内貨分 3,000千リエル
計画III 国際通信

国際テレックス等

外貨分 1,000千米ドル

内貨分 3,000千リエル

計画IV 入 事

内貨分 20,000千リエル

財 源 投下資本を利率4%, 3年猶予, 10年間延払いで借入れる。その償却は
郵電省の収支の黒字をもつてあてる。

以上が計画の概要であるが、以前の案にくらべると地方電話局の拡張、市外回線の拡張など多くのものが削られている。

郵電省の収支は1968年度25百万リエル、1969年度前半が11百万リエルの黒字であり、今後の黒字の伸び率として20%をみこんで借入金の償還をもくろんでいるが、20%という数字は少し高すぎるように思われる。また、年報では68年度の利益は20百万リエルであるから、この計画書に引用されている数字とちがっている。

6. 今後の課題

電気通信の現状は以上に紹介した如くであり、現在の電話普及は信じられない位に低いものである。しかし、電気通信部門のみが遅れているのではなく、凡ゆる面において外国と比較した場合には同じようなことがいえるから驚くにはあたらない。現在は農業生産と教育に国策の重点が置かれているようであり、経済活動も余り活潑でないこと、通信料金の高価なことおよび通信サービスの悪いことから電気通信への認識も関係者以外には全然無いようである。このような現状の打破にはまずサービスの改善がとりあげられなければならないと考えるが、そのためには次のようなことが必要である。

1) 電話機数の増加

現在の電話普及率は100人あたりの電話機は0.1台であり、GDP10万米ドルあたりの電話機は1台である。電話機というものは多い程、その効用が増すものであり、E C A F Eの運輸通信委員会ではE C A F E地域の電話機数の目標としてとりあえずはGDP10万ドルあたりの電話機数を4台としている。従ってカンボディアにおいても現在の電話機数を4倍にすることをとりあえずは目標にすべきだと思われる。現在の市外回線距離は電話機1台あたり1.5 kmであるが、このような市内電話の拡張に伴ない、当然市外電話回線も拡張されなければならない。この拡張は量もさることながら質も重視したものでなければならない。

2) 郵電省の近代化

前次官は日本の電気通信事業を見てその発展に驚き、日本から専門家を招いて経営指導にあたってもらおうとしたこともあるとのこと、現総局長ウム・ツム氏も電気通信事業を国

営から分離して能率をよくしたいという意向を持っているようである。しかし、能率以前の問題が多くありすぎるのではなからうか。安い給料で汚職を当然のこととしている国で近代的な経営が成立する筈もないと思われる。当面は国営で情報省、国防省を始めとする政府機関の通信の拡大をはかり実力をたくわえるのがよいのではなからうか。

3) メコン開発との関連

メコン開発委員会のサンポール・ダム開発の内部プロジェクトとして通信もとりあげてもらいと本体工事に比して僅かな金額であるから、クラチエ～コンボン・チャム～ブノンベン～スパイ・リエン～サイゴンという連絡回線は容易に設定できるのではないかと考えられる。カンボディアは設備の一部を賃借して公衆回線を作成するとともに、設備の保守にあたり、その料金を相殺すれば、負担は少なくてすむと考えられる。しかし需要の多い Battambang, Sihanoukville への回線についてはこのような方法もとれないであろうから、独力で建設せざるを得ないであろう。

4) 日本の技術協力

日本からの援助にあたっての壁はフランス語の問題と低利・長期の資金の供給の問題である。前者については学校教育との関係でフランス信仰はぬき難いものがあるようであり、資金を借りるについても同じ条件でならフランスからということになる模様である。後者の問題については返済能力ということに対して疑問無しとはいえないが、ダムの建設の効果は10年を単位としたものでないと解らないと考えられるのに対し、電気通信関係のプロジェクトでは2年ないし3年といった単位で効果が現われるのであるから、ダムのような長期展望に立つ援助とともに、すぐに役立つ援助として電気通信の部門についても今後おおいに推進する必要があると思われる。

R A P P O R T
sur les activités des P&T
pendant l'année 1968

I. SERVICE DES POSTES

1°) Nombre de bureaux des P&T :		1968	1967
- Bureaux principaux	=	41	39
- - limités	=	16	16
- - secondaires	=	4	4
- Postes rurales	=	97	97
		<u>158</u>	<u>156</u>
		Total	

Deux nouveaux bureaux ont été ouverts dans le courant de l'année:

- Thmar Kaul
- Neak Loeung

Accroissement = 1,28%

2°) Nombre de boîtes postales

		1968		1967	
		existantes en Sce.		existantes en Sce.	
- Phnom-Penh	873	873	721	721	
- Provinces	232	200	232	194	
	<u>Total</u>	<u>1.105</u>	<u>1.073</u>	<u>953</u>	<u>915</u>

Accroissement: boîtes mises en service: 17,26^o/o

3°) Timbres-poste

	A) Emission:	1968	1967
a) Nombre		2.595.000T	3.522.855T
b) Montant		12.985.000	17.581.033
c) Séries			

- Universités
- XXè Anniversaire de l'OMS
- XIXè Jeux Olympiques de Mexico
- Croix Rouge Cambodgienne
- XVè Anniversaire de l'Indépendance
- Année Internationale des Droits de l'Homme

	B) Vente	1968	1967
a) au Cambodge	=	14.446.626/50	14.610.795/00
b) à l'étranger	=	1.116.208.09	1.376.210.10
	<u>Total:</u>	<u>15.562.834.59</u>	<u>15.987.005.10</u>

Diminution: 2,65%

4^o) Mandats:

	Nombre	Montant	Droit
A) Régime intérieur			
- émission =	33.740	60.442.951/72	437.784/00
- paiement =	33.517	50.767.878.41	néant
B) Régime international			
- émission =	4.129	7.025.669.75	95.809.76
- paiement =	297	495.468.63	néant
C) Droit encaissé:		1968	1967
		533.593/76	546.005/92

5^o) Envois postaux (chiffres relevés au Bureau central de Phnom-Penh
Phnom-Penh seulement)

	Départ	Arrivée	Transit
A) Régime intérieur			
- Lettres ordinaires	389.842	428.572	542.136
- Lettres recommandées	72.889	114.931	46.383
- Cartes postales	235	681	10.512
- Imprimés et journaux	300.028	25.786	7.456
- Imprimés recommandés	111	30	4
- Paquets ordinaires	19.310	12.045	4.740
- Paquets recommandés	3.930	4.207	6.917
B) Régime international			
a) Voie de surface			
-Lettres ordinaires	723	6.192	512
-Lettres recommandées	423	3.290	159
-Cartes postales	482	1.154	462
-Imprimés et journaux	152.177	7.794.635	466.717
-Imprimés recommandés	234	4.524	81
-Paquets ordinaires	366	56.047	5.579
-Paquets recommandés	6.987	11.703	960
b) Voie aérienne			
-Lettres ordinaires	1.110.004	1.660.497	554.649
-Lettres recommandées	65.335	54.427	10.647
-Cartes postales	76.614	31.352	8.557
-Imprimés et journaux	602.745	646.405	106.213
-Imprimés recommandés	260	3.129	214
-Paquets ordinaires	3.530	22.153	4.906
-Paquets recommandés	13.394	19.335	1.575
Nombre total des envois	2.819.619	10.901.095	1.779.379

6^o) Colis postaux

-Régime intérieur	Départ =	8	42
	Arrivée =	5	42
-Régime internal	Départ =	713	1.045
	Arrivée =	17.671	16.355

-Ouverture des services de colis postaux dans le courant de l'année:

- avec Singapour : colis " Avion "
- avec la Nouvelle Zélande : colis " Avion " et par voie de surface

7^o) Courriers postaux

-Création de nouvelles lignes de courriers:

- entre Battambang et Pailin
- entre Battambang et Siemreap via Sisophon

8^o) Contrôles en matière postale

-Lettres insuffisamment affranchies	= 7.664
-Lettres dont le complément de taxes est déjà perçu	= 2.079
-Lettres taxées	= 5.046
-Objets versés au rébut	= 820

II. SERVICE DES TELECOMMUNICATIONS INTERIEURES

1^o) Longueur des lignes interurbaines:

	1968	1967
en Km. x fil:	10.192	10.096

2^o) Télégraphe

	1968		1967	
	Nombre	Mot	Nombre	Mot
A) Télégrammes déposés	43.456	954.160	44.447	911.266
B) Nombre de lignes, circuits et voies:			1968	1967
-Morse sur lignes aérienne		circuits directs	15	14
		omnibus	35	35
-Circuit de téléimprimeur			1	néant
-Liaisons par voie TSF			3	3

3^o) Téléphone

A) interurbain	(circuits naturels directs	:	21	20
	- omnibus	:	76	76
	- courants-porteurs:		22	12
B) urbain	(lignes principales		3.822	3.237
	(lignes secondaires		3.108	2.870
C) communications interurbaines		482.879	352.725

4^o) Travaux réalisés

A) lignes aériennes

-Installation de nouvelles lignes: 96Km x fil

Accroissement: 0,95%

-Courants-porteurs:

- Mise en service des lignes ci-après:

		6 voies	"courants-porteurs"
Phnom-Penh - Kg. Cham			
- /Sihanoukville:	8	-	-
- /Battambang :	3	-	-
- /Kampot :	3	-	-
- /Siemreap :	1	-	-
- /Kg. Speu :	1	-	-
- /Svay Rieng :	1	-	-

B) Câbles

-Pose de nouveaux câbles: 520Km. x fil

C) Tableaux, standards et autocommutateurs:

-Installation	(tableaux =	-
	(standards =	4
	(autocom. =	10
-Réparation	(tableaux =	4
	(standards =	4
	(autocom. =	9

D) Postes d'abonnés

-Installation de nouveaux postes (P.P. : 531 16,13%
(P.S. : 110 3,66%

-Dérangements relevés : 13.930 soit 3,64 dérangements
par abonné par an

E) Radio

-Installation d'une antenne doublet d'émission et de
réception à la station de TSF à Eratié

-Reconstruction d'une antenne doublet d'émission au Centre
d'Emission de Kambaul.

50) Autres activités

- Travaux de basculage de 2000 lignes d'abonnés du Central
Strowger au Central Penta Conta de Phnom-Penh;

- Transfert des bureaux des P&T de:
- Kompongkdey
- Stung Trèng

III. SERVICE DES TELECOMMUNICATIONS INTERNATIONALES

1^o) Télégraphie 1968 1967

A) Liaisons directes 8 8

B) Nombre de télégrammes

	Départ		Arrivée	
	Nombre	Mots	Nombre	Mots
- Voie Hanoi	10	574	464	17.925
- - Hong Kong	35.708	1.713.041	38.150	1.736.162
- - Osaka	16.538	875.533	20.096	807.137
- - Paris	22.533	863.462	12.819	378.363
- - Pékin	92	3.246	200	9.336
- - Saigon	11.379	437.973	14.347	493.586
- - Shanghai	5.948	197.136	5.5888	152.634
- - Vientiane	764	13.852	1.126	34.065
Total:	92.972	4.104.817	92.790	3.629.208
Chiffre de 1967 :	84.999	3.843.956	79.814	2.872.381
Accroissement:	9,38%	6,78%	16,25%	26,34%

20) Téléphone

A) Liaisons directes = 1968 4 (6 voies) 1967 4 (4 voies)

B) Nombre de communications:

Pays correspondants	Départ		Arrivée	
	Nombre	Durée	Nombre	Durée
- Allemagne	7	58'	2	23'
- Australie	19	108	15	75
- Autriche	2	6	1	3
- Belgique	1	5	-	-
- Canada	3	18	1	3
- Chine populaire	49	329	38	169
- Etats Unis d'Amérique	30	269	25	193
- France	514	3.741	263	1.894
- Grande Bretagne	12	56	2	7
- Hong Kong	6.065	34.413	3.332	15.762
- Hollande	1	4	-	-
- Inde	1	5	-	-
- Indonésie	6	130	-	-
- Italie	5	17	5	61
- Japon	425	4.151	236	2.544
- Malaysia	2	10	7	31
- Philippines	5	29	12	60
- Suède	1	4	-	-
- Suisse	7	67	5	35
- Singapour	999	6.370	550	3.265
- Yougoslavie	1	3	-	-
Total :	8.155	49.793	4.494	24.125
Chiffre de 1967 :	5.714	31.840	3.111	17.556
Accroissement :	42,71%	56,38%	44,77%	37,42%

30) Autrea activités

- Service temporaire de transmissions radiophoniques (voice cast) entre Phnom-Penh et Paris;
- Service temporaire de téléphotos entre Phnom-Penh et Tokyo
- Mise en service d'un nouveau circuit téléphonique entre Phnom-Penh et Hong Kong;
- Ouverture de la Station côtière de Sihanoukville (1-2-68)
- Location de circuits télégraphiques directs:
 - Voie Phnom-Penh/Paris = 1
 - " " " /Hong Kong = 3
- Implantation de 4 antennes "losange" directrices au Centre d'Emission de Kambaul;
- Augmentation de la durée de vacation des liaisons télégraphiques entre:
 - Phnom-Penh et Osaka
 - " " et Shanghai
 - " " et Hong Kong
- Amélioration de l'état des lignes télégraphiques internationales par l'installation des équipements ARQ, TOR au BCR de Phnom-Penh;

- Travaux de sonorisation à la cité sportive à l'occasion de la Conférence Internationale sur le financement du barrage de Prèk Thnot;
- Raccordement du Centre de Réception de Pochentong au réseau de l'EDC;
- Travaux de revision générale d'un groupe électrogène de 300KVA à Kambaul;
- Fonctionnement, entretien, dépannage des groupes électrogènes à la Cité princière de Kompongseila et fourniture de carburant et de lubrifiant;
- Travaux de mise au point de 2 émetteurs de 30KW BLI au Centre d'Emission de Kambaul.

IV. BATIMENTS

- Travaux d'aménagement du BCR de Phnom-Penh en vue de l'installation d'équipements ARQ;
- Construction en cours d'un bâtiment en dur servant de central téléphonique automatique de 1000 lignes à Battambang (Travaux réalisés: 60%);
- Construction en course d'un bâtiment en dur à étage servant de Centre de Réception pour la Station Côtière de Sihanoukville (Travaux réalisés: 90%).

V. PERSONNEL

A) Effectif existant		1968	1967
Personnel commissionné	:	581	585
" journalier	:	134	87
" contractuel	:	21	13
" volant	:	464	468
		<hr/>	
Total		1.200	1.153

Remarque: une diminution du nombre de personnel commissionné de 0,68%

B) Mouvement du personnel

	Comm.	journalier	contractuel	volant
- Recrutement	3()	40(1)	3	12
- Démission	-	3	1	6
- Affectation	35	6	-	-
- Peines disciplinaires	1	-	-	-
- Poursuites judiciaires	14	-	-	-
- Retraite	1	-	-	-
- Décès	1	-	-	-

(1) formalités en cours

C) Autres activités

- Concours de recrutement de 2 inspecteurs et 2 ingénieurs des P&T;
- Admission de kamakars volante dans l'état de maintien;
- Prélèvement du personnel pour servic dans la Police Royale;

VI. INSPECTION

A) Vérification de caisse, contrôle du personnel flottant et de la consommation d'eau et électricité	1968	1967
	10 fois	59 fois

B) Autres activités

- Enquêtes diverses effectuées aux bureaux de:

- Phnom-Penh 1er
- Battambang
- Stung Trèng
- Pailin

- Passation de service dans divers bureaux des P&T du Royaume.

VII. ACTIVITES DIVERSES

10) -Réunions de travail ont eu lieu dans le courant de l'année.

20) -J.S.R.K.

- Stage paramilitaire à Prey Sâr des Yuvans des P&T;

- Service de sécurité assuré par les Yuvans des P&T au Ministère des P&T;

- Participation de nos Yuvans aux diverses mission avec les autorités locales.

30) Association des postiers

- Réunion en vue de fixer les critères de prêt sur la caisses de l'Association

- Situation financière de l'Association:

a) Recettes	740.906
b) Dépenses	196.413

Solde en caisse
au 31-12-68 : 544.493

40) Programmes éducatifs

- Démonstration des activités et de l'utilité des P&T sur le plan social, culturel, économique et politique par radio, TV et voies de presse.

50) Sport

Notre équipe féminine de basket-ball "TELESPORT" a été classée 3è du Cambodge (sur 9 équipes engagées) lors des dernières compétitions comptant pour le Championnat du Cambodge 1968.

VIII. SITUATION FINANCIERE

A) Recettes	Année 1968	Année 1967
- Postes	19.332.990/85	17.785.912/50
- Télég. intérieur	2.540.631.99	2.571.518.89
- Télég.international	38.512.725.77	39.316.936.38
- Téléph.intérieur	31.637.165.76	25.779.139.79
- Téléph.international	4.109.145.26	2.755.451.10
- Article d'Argent	533.491.58	544.909.06
- Compte internationaux	3.233.882.70	4.111.935.43
Totaux	99.900.033.91	92.875.803.15

B) Dépenses	Année 1968	Année 1967
a) Transports postaux	8.000.000 00	4.248.258 90
b) Matériels	33.519.752.83	28.446.242.87
c) Personnel	40.533.374.98	39.792.841.73
	<hr/>	
Totaux:	82.053.127.81	72.487.343.50

IX. PROJET

Un projet d'amélioration et d'extension du réseau national des P&T est en cours d'élaboration./-

第 V 章 放送事情

1. テレビジョン放送

1.1 放送設備

カンボディアのテレビジョン放送機関は、TVRK (Television Royale Khmère) という名称の放送局が首都 Phnom Penh に一局あるだけである。使用テレビジョン方式はアメリカ FCC 標準方式で、1966年2月に開局し、この一局でグレードB域内の対人口カバレッジは全国のおおよそ46%、約300万人に達するものと推定される。

開局当初の放送設備は、そのほとんどが日本製のものであつたが、1969年にフランス政府の援助にもとずき、テレビジョンカメラ等のスタジオ機器一式が増設された。

現在の放送設備の概要は次の通りである。

(1) 送信設備

ア、送信所の位置	Phnom Penh 西北部 (Tuol Kouk) 北緯11度35分 東経104度54分
イ、放送機出力	映像5KW、音声2.5KW (NEC製)
ウ、周波数	オ8チャンネル (180-186MHz) アメリカFCCチャンネル系列
エ、空中線	スーパーターンススタイル12段、利得11dB ふく射中心地上高112M (海拔122M)
オ、給電線	W-39D 約110M
カ、実効ふく射電力	映像 50Kw、音声 25Kw
キ、鉄塔	100M自立式四角鉄塔

(2) 演奏設備

ア、テレビスタジオ	床面積 15M×12.5M 天井高 7.6M 照明設備 60KW (フラット・ライト)
イ、カメラ	真空管式イメージオルシコンカメラ 2台 (フランスTHOMSON製)
ウ、テレシネ	真空管式ビデコンカメラ 1台 (NEC製) トランジスター式ビデコンカメラ 1台 (THOMSON) 16mmフィルムプロジェクター 2台
エ、VTR	NEC TT-4B形
オ、局外中継設備	中継車 1台 (撮像設備はスタジオと共用) FPU (6GHz帯) 送受信装置一式
カ、その他	演放連絡線 同軸ケーブル (5C-2V) 300M

(3) 中継局

Phnom Penhの放送設備購入と同時に、Bakorに設置予定の送信出力100W、(オ11チャンネル)のサテライト設備を購入した。しかし、設置上の技術的調査が不十分であることと、予算の関係で、現在に至つても設置されずに、Phnom Penh郊外の、Kambaulの国際無線中継所の倉庫に放置されている。

1.2 放送時間および放送番組

放送時間は、月水金土曜の午後6時から同8時までの1週4回計約8時間だけである。プログラム内容の1週間分を分析すると、大体次のようになる。

総放送時間	8時間20分
報道番組	1時間4分(13.4%)
教育・教養	3時間4分(36.2%)
娯楽	3時間10分(38.0%)
CM	42分(8.4%)
その他	20分(4.0%)

放送に使用されている言語は、そのほとんどがカンボディア語(クメール語)で、フランスから借用したフィルムはフランス語のまま放送している。

報道番組としては、定時ニュースと政局解説がニュースキャスターにより、国際事情・スポーツニュース等はフィルムで随時放送されている。また毎土曜日には一週間の動きをフィルムで放送している。

教育・教養番組は、古典民族芸能・美術・保健衛生などで、教育的なものよりむしろ教養的なものが多い。娯楽番組としては、時々寸劇的なドラマあるいは、古典的演劇の一部を放送することがあるが主体はフランスから借用のフィルム番組で、特に土曜日は長編フランス映画が毎週放送されている。TVRKは国営ではあるが広告放送も実施されていて、時計・トランジスターラジオ・オートバイ等のコマーシャルが数分間定時に放送される。また、カンボディア映画の予告編のようなものが10数分にわたつて延々と放送されたりしている。

その他、国家の催し物等には特別番組として長時間の局外ナマ中継が実施される。

特に毎年6月、12月末頃に実施される国民会議の中継と、夜間に同じ会場で催される素人のど自慢コンクールのようなものの中継はかなり人気がある。

1.3 普及状況

カンボディアでは、テレビジョンの受信は無料で、かつ、届け出の制度があるわけではないので普及状況をはかる資料がない。一説には、7,000台とか10,000台ともいわれ、テレビ局の職員には3,000台と推定している人もいるように確かな数字は全く不明である。仮りに1万台としても、Phnom Penh市内の人口は約60万人といわれているので60人に1台の割合となり、これは我々が市内を歩いてみた感じではかなりオーバーな値ともとれる。いずれにしても普及率はきわめて低い。

受像機はもちろん全部輸入品ばかりで、店頭価格は、16インチ程度でも7-9万円位である、同じ輸入によつてまかなわれている自動車・オートバイ等がかなり良い普及状況を見せているのに比して、テレビジョン受像機の普及のテンポはおそ過ぎる感がある。これはまだ高価格のせいもあり、貧弱な電力事情にも原因があるが、それ以上に放送される時間が少ないこと、その内容に国民を引きつけものの少ないことが原因となつているようである。ブンベン市街では、ベトナムのサイゴンでアメリカ軍が実施しているテレビジョン放送の電波が、200KM以上にもおよぶ距離があるにもかかわらず届いている。

これは放送時間が多く、プログラム内容も豊富で娯楽性に富んでいることもあつて、きわめて悪い受信画像であるにもかかわらず、多素子の高利得アンテナを設置してこれを見ている現状である。このことが、カンボディア国内の受像機の普及促進に一役かつているようにも思われた。

1.4 組織など

ラジオ・テレビジョン放送はもともとはMPTの所管であつたが、1965年に情報省に移管された。組織は第VI-1図のとおりである。TVRKの人員総数は約60名である。

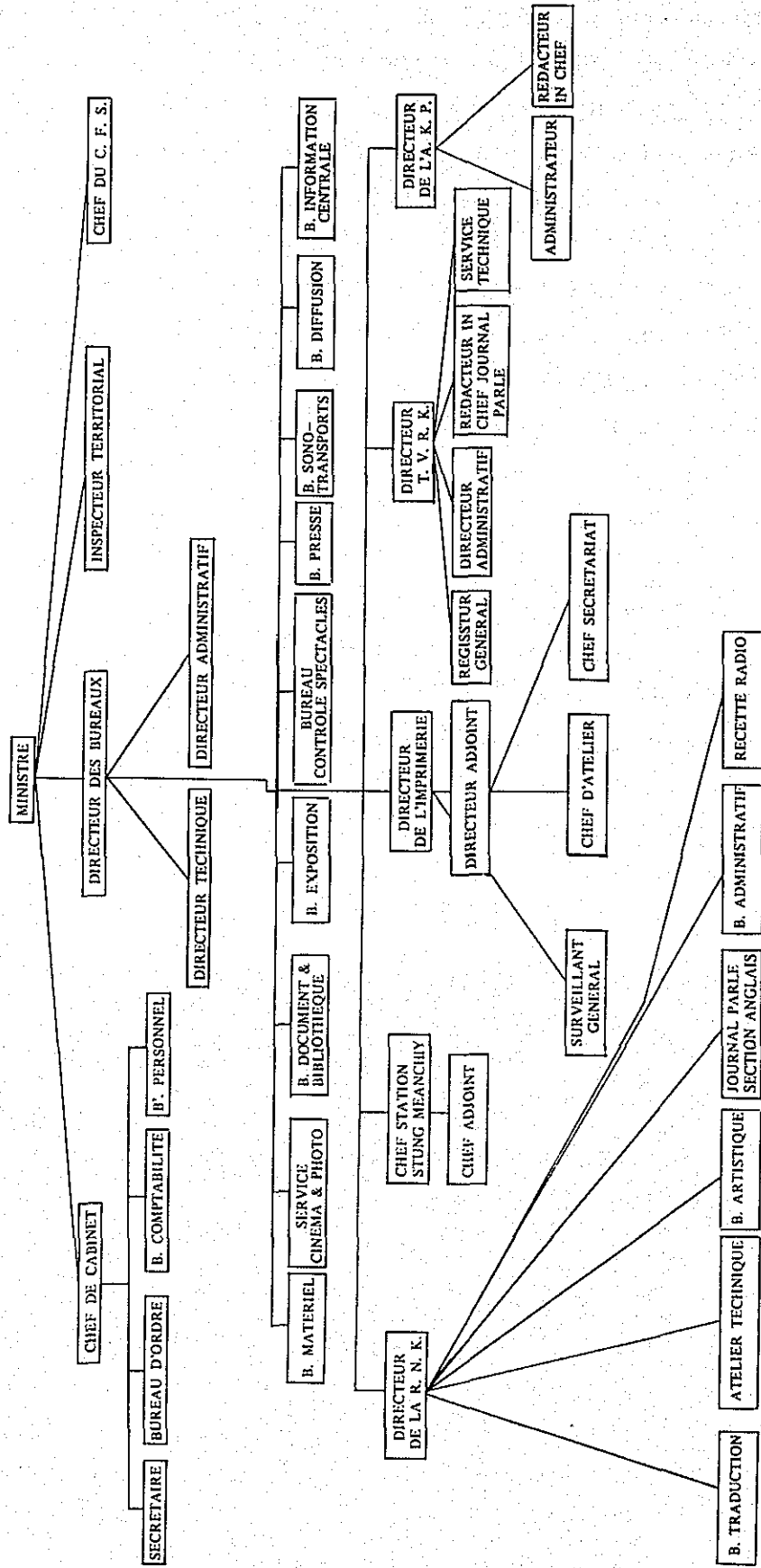
我々の調査に色々と協力を願つた技術部門について少しのべると、

技術部長Ng o H o n g B o u氏(ゴ-ホン-ブー)は、日本の大学で6年間学んだ人で日本語は非常に堪能である。現在同氏の下に、送信所要員、スタジオ調整要員等全部で13名の技術者がいる。技術員の役割は日本の場合とは多少異り、テレビジョンカメラの操作、スイッチングなど番組制作関係の業務は放送部門の担当となつていて、技術部門の担当は、

第 W - 1 図 情報省の組織

GOVERNEMENT DE S. E. GENERAL LONNOL

ORGANIGRAMME DU MINISTERE DE L'INFORMATION



これらスタジオ機器の保守と送信技術に限られている。

テレビ局建設時の機械設備を日本のNECが引受けたこともあつて、開局当初から技術部門に日本から海外技術協力事業団を通じて援助が続けられている。現在はNHKの技術者1名が派遣されているが、前記技術部門の担当の関係から番組制作技術に関する指導の機会が与えられておらず、技術面の相談役とはいいながら機器の故障修理の相談が主であることに若干問題がありそうである。テレビジョン局の予算についてはその内容を知ることができなかったが、受信料制度もなく広告放送をしてもその収益は直接国庫に入るようになっており、すべて国家予算にしばられていて、設備の改善、番組の拡充のための予算はなかなか認められないようである。このため放送時間をさらに延長するのは当面むずかしく、設備の補修、予備品等の補充もあまりなされていないようである。

2. ラジオ放送

2.1 放送設備と放送時間

カンボディアにおけるラジオ放送は、国民大衆に対する政府施策の伝達、ニュース報道の伝送、教育の普及、娯楽の提供などとその果たす分野は広く、役割りは高い。

ラジオ放送は、テレビ放送と同様に情報省に所属し、プログラムの制作、放送、設備の保守等すべて情報省の職員が担当している。

放送局の現状は第Ⅵ-1表に示すようにPhnomPenh, Battambang, Kepの3か所である。

第Ⅵ-1表 放送局一覧表

局名	周波数 (kHz)	空中線電力 (kW)	送信機 製造国	空中線型式	備考
PhnomPenh	740	20	中共	垂直	地上高72M
	918	120	オランダ	垂直	
	4,907	50	中共		
	6,090	50	オランダ		
	94,000	5	オランダ	V型12段	Kepへの放送中継用
Battambang	1,315	1	ブラジル	Y型	地上36.5M
Kep	1,540	1	オランダ	垂直	

ラジオ部門に対しては中共が積極的に援助している。PhnomPenhの送信所は市の中心から南西へ6KM離れたStung Meancheyにあるが、その設備のうち、20kW中波送信機(740kHz)1台と、50kW短波送信機(4,907kHz)1台および、

短波共通予備機 1.5 kW 1 台とを贈与しており、1970 年度計画としては、旧型の 20 kW 1 台と 5.0 kW 2 台を贈与する予定であるとのことであつた。またこれらの設備を保守するため 2 人の中共技術者が常駐している。

超短波放送については、94 Hz の FM 送信機をもつてはいるが、これは放送用ではなく、Kep 放送局への番組中継用として運用されている。Stung Meanchey 送信所の広い敷地には中波、短波、FM と各種のアンテナが林立しており雑然とした感じを受けた。送信所には 41 名の職員が勤務している。

Phnom Penh のスタジオは情報省の構内にあつて、中共の建設になる 300 M² ぐらいの大スタジオや、アナウンス専用の小スタジオなど合計 7 つのスタジオがある。送信所まではケーブルで結ばれている。

カンボディアオ 2 の都市 Battambang の 1 kW 送信機は 1970 年中には日本電気から購入の 10 kW 送信機 (5 kW 2 台並列運用) に取替える予定である。

町はずれの送信所は Battambang の金持ちが寄付した 60 万リエル (390 万円) で土地や建物を購入し、送信設備だけは国家財政からの支出であるという。

市内にあるスタジオは Phnom Penh と比較すると非常に貧弱で、防音装置もない小さなもので、古びたテープレコーダーからもつぱら音楽を流す程度である。

ニュースなどは Phnom Penh からの短波放送を受信して再放送している。

ベトナムに近い海沿いの町 Kep には 1 kW の中波送信機がある。職員は Battambang, Kep とともに 2 名である。Phnom Penh 局の定時放送時間はオ VI - 2 表に示される。

オ VI - 2 表 放送時間

区 別	周波数 (Hz)	時 間
国内放送	918	5時10分-10時、11-15時、16時-23時
	4,907	ただし、日曜、祭日は 6時-23時
国際放送	740	6時-8時、11時-14時、16時-23時
	6,090	ただし、日曜、祭日は 6時-23時

国内系統の放送はカンボディア語を主とし、国際系統は、その他にフランス語、中国語などがかなり含まれる。放送にはテレビジョン放送と同様にコマーシャルも入れている。

2.2 普及状況

中波放送 3 局によりサービスエリアは全人口の 80 % におよぶと推定される。そしてトランススタラジオに対する人気は高く、ラジオ受信機の普及は著しい。

南国にあつて、衣食住にあまりとんちやくしない一般大衆にとつてみれば、ラジオ受信機と自動車、情報の入手と交通の手段として身近な欲望の主流を占めているといえる。金がたまるとまずオ一番にラジオ受信機を買うとまでいわれている。商店や食堂はいうにおよばず、道路に店開きした露店商たちでさえ楽しそうにラジオから流れる音楽を聞いている光景をしばしば見かけた。

コンボンチュナン州の置局調査に先だつて州知事に挨拶に行つた時、知事が日本製のラジオをさげてわれわれの前に現われたり、また山に登るとき、護衛についてきた兵隊が、日本製の小型ラジオを胸のポケットにしよばせていつも聞いていたのには驚いた。

娯楽の面ばかりでなく、国の最高幹部が政策をPRしたり、国民世論の統一のために使うなど政治面での重要性もきわめて大きい。シアヌーク殿下が今年の一月に病氣療養のために、フランスへ突然行つた時、Phnom Penhの病院からラジオを通じて演説しているのを耳にすることができたのもわれわれの思い出の一つである。

いずれにしろ、ラジオの普及率が80%あるという政府関係者の言も、誇張ばかりとはいえない気がする。

第 VII 章 一 般 事 情

カンボディアは、戦乱のインドシナ半島のなかにあつて、今までただ一つ、政治的に安定した国であつた。それはシアヌーク殿下が外交の基本方針を「独立、中立ならびに領土の保全」とし、弱体なこの国を東西の勢力の均衡の上に巧みに置いてきたところによる。

しかし、本年3月11日、デモ隊による北ベトナム、南ベトナム臨時革命政府兩大使館への襲撃に続き、3月18日、フランスへ外遊中のシアヌーク殿下が国家首席 (Chef d'Etat) の地位を追われ、カンボディアは、急速に反共陣営に接近し始めた。その後の経過は誰しもがよく知っているところである。なお、今実権をにぎっているロン・ノル首相は1966年10月から約6カ月間首相に就いたことがあり、その後1969年8月再任されて現在に至っているものである。

カンボディアの首都 Phnom Penh は人口約60万人で、豊かな水をたたえたメコン河とトレンサップ川が集まり、再びメコン河とバサック川に分かれて流れて行くところにある。整然とした町並みのいたるところが緑の芝生におおわれ、ブーゲンビリヤの紅い花が咲き、全体が公園のようである。

Phnom Penh は、ベン女王の丘という意味であつて、その名はこの美しい町にまことにふさわしい。

われわれは、この Phnom Penh や、人類の偉大な財産であるアンコール・ワットが戦火にさらされることなく、そしてわれわれが接した素朴で温和な人々の上に、一日も早く平和な日が返ってくることを願うものである。

カンボディアの情勢は極めて流動的であるが、この報告書においては、本調査団が滞在していた時点での調査に基づいて記述することとしたい。

1. 地理風土

1.1 地 理

ひと口に言つて、カンボディアはタイと南ベトナムの間にある。また、北は一部ラオスと国境を接し、南西はシャム湾に面している。緯度は北緯10度から14度の間にあり、また経度は東経102度から108度にわたつて位置している。日本との時差は2時間である。

面積は18万1,000 km²で、日本の約半分であり、タイの約 $\frac{1}{3}$ であるが、南ベトナムよりはわずかに大きい。国の大部分は平地で、山らしい山は西のタイ国境から南東へ伸びた山脈が、250 kmほどにわたつて続いているだけである。この国の最高峰ブノン・オーラル (1,813 m) や、この国の避暑地ポコール、キリロムなどがこのなかにある。

川は世界で10番目に長いメコン河が、その全長4,200 km (北海道稚内から鹿児島までの直距離は約1,800 km) のうちの500 km をカンボディア領内で過す。われわれが滞在した12月から1月末にかけては減水期にあたっていたが、それでも薄茶色に濁つた

水を川幅いっぱいにつたえて、メコン河はゆるやかに流れていた。

このメコン河とトンレサップ湖の両側に、北西から南東への南ベトナムまで広がる広大な沖積平野があり、これらは海拔10mから30mの平坦な土地である。この国の農業のすべてと言つてよい収穫がこの平野部で得られる。

中央平野からゆるやかに、ようやく300m程の高さにまで達した高原地帯が北部にある。これらはサバンナ地帯であり、場所によりジャングル地帯でもある。

カンボディア北部とタイとの国境は、東から西へ300kmにもおよぶ長い絶壁で形成されている。タイ側は海拔数百mのコラート高原がなだらかに北へ傾斜しているが、カンボディア側はその高原の南端から一挙に50~150mの高さに落ちて、北部高原から中央平野部へとつながっている。

1.2 気 象

カンボディアは熱帯モンスーン地帯にある。モンスーンの影響により、例年5月から10月までは雨期、11月から4月までは乾期と、シーズンを明確に分けており、東南アジア一帯の気候として、よく知られている。しかし、日本で北海道と九州とでは気候に著しい差があるように、常夏のカンボディアにおいても国全体が同一の気象のもとにあるわけではない。それは緯度、たつた一つの山脈、そして海等の影響により差異が認められるのである。

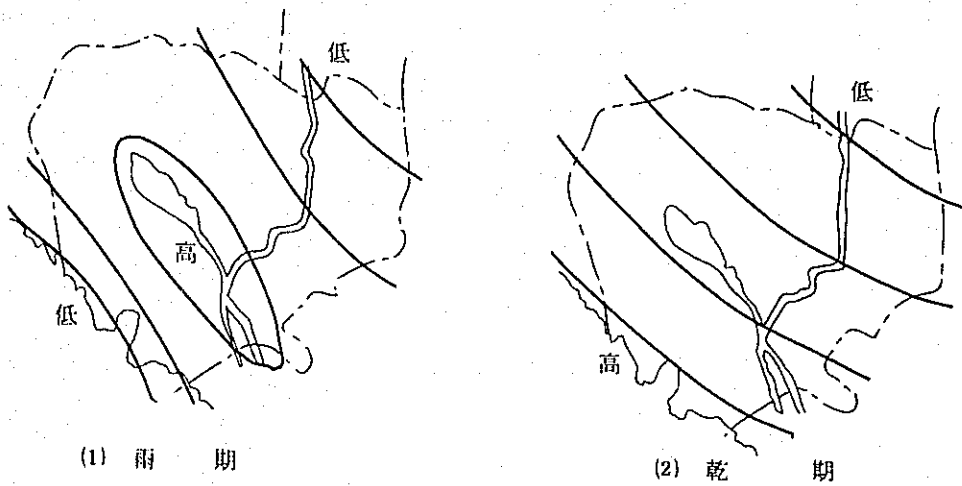
カンボディアは大別して三つの気象区に分けられる。海岸地帯、中央平野地帯および北部地帯である。

雨期に吹く風は南西のモンスーンであり、第VII-1図の(1)に示すように、気温は中央平野地帯が最も高い。乾期には北東のモンスーンが吹き、第VII-1図の(2)の傾向となる。過去10年の統計によると、Phnom Penh(中央平野地帯)、Sihanoukville(海岸地帯)およびStung Treng(北部地帯)の平均気温は、第VII-2図のとおりである。図からわかるように、気温は4月が最も高く、1月が最も低い。また高低差は少なく、平均気温は1年を通じて高い。Phnom Penhにおける最高、最低気温の記録は、40.5℃(4月)、14.0℃(1月)、平均気温は27.4℃である。また過去1カ年の最高、最低および平均気温は第VII-3図のとおりであつて、40℃近い日が続く4月頃は日本人は夜もじゆう分眠られないという。参考までに、東京における8月の平均気温は26.4℃、1月のそれは3.7℃である。

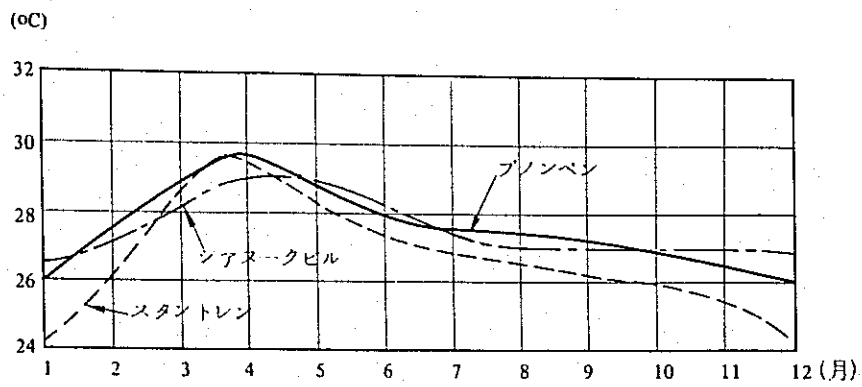
われわれ調査団が滞在した12月、1月は最も良い季節で、Phnom Penhのホテルのベランダで測定した平均値は、朝6時は25.5℃、湿度73%、日中の最高気温が33℃、湿度48%であつた。このように気温は高いが湿度が低いので、日なたの強烈な太陽をさけて木蔭へ入ると、忽ち涼しさを覚えたものである。

カンボディアは毎年多量の雨に恵まれている。

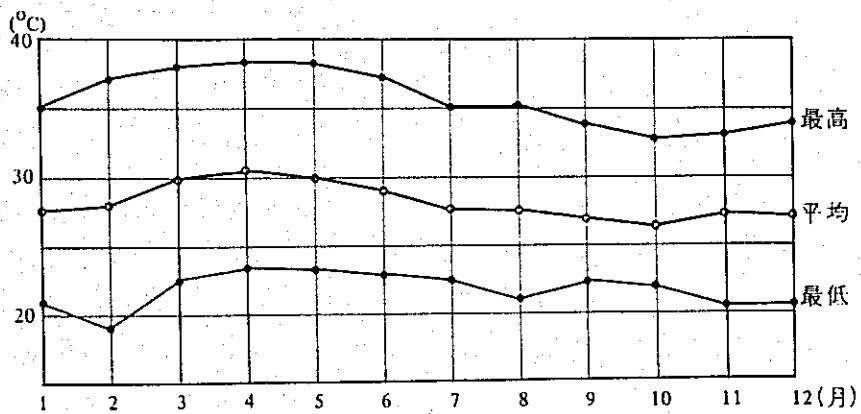
降雨量とその型はモンスーンと密接な関係がある。第VII-4図にPhnom PenhとSihanoukvilleの過去10年間の月別平均降雨量を示す。全国的な統計によれば、



第VII-1図 等温度線略図



第VII-2図 平均気温

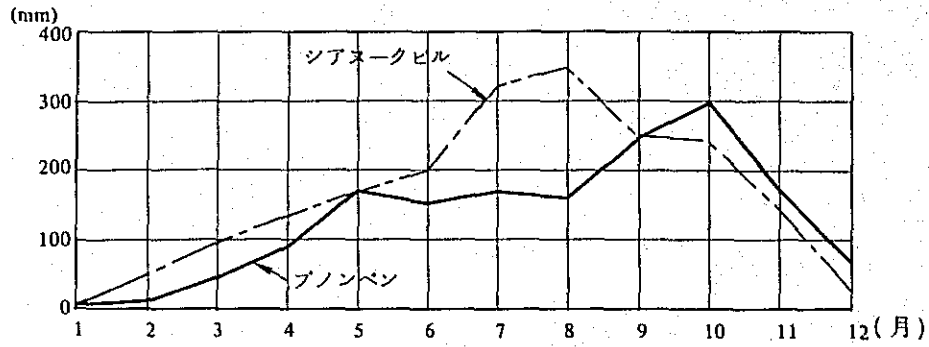


第VII-3図 ブノンベンにおける過去
1年間の月別平均気温

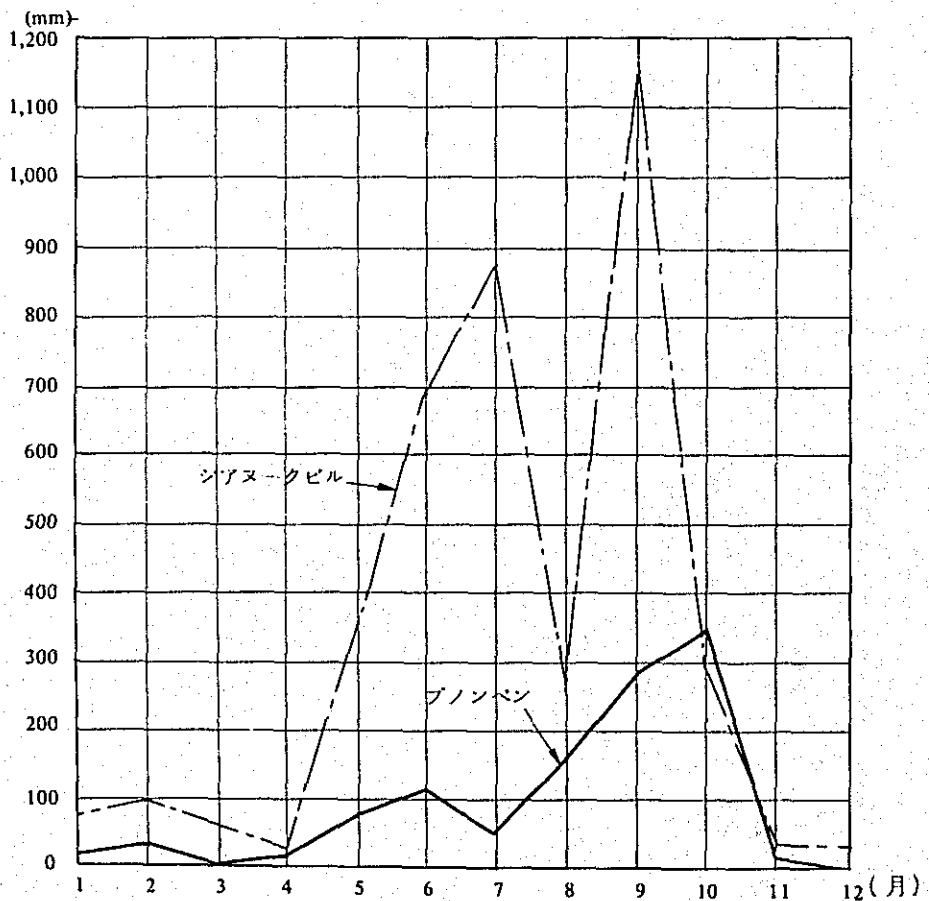
南西海岸地帯が最も多く、北東部丘陵地帯が比較的少ない。

平均降雨量は第Ⅶ-4図のとおりであるが、雨は毎年平均していちように降るとは限らない。過去1年間の降雨量は第Ⅶ-5図で示される。

また、1968年における全国主要都市の1日当りの最大雨量、月別の最大・最小雨量については第Ⅶ-1表に示すとおりである。



第Ⅶ-4図 平均降雨量



第Ⅶ-5図 プノンペンおよびシアヌークビルにおける過去1年間の降雨量

第VII-1表 主要都市の雨量

(Based on the data in 1968)

Station	Maximum Quantity of Precipitation for 24 Hours		Maximum and Minimum Quantity of Precipitation for a Month			
	Quantity (mm)	Month	Max.(mm)	Month	Min. (mm)	Month
Phnom Penh	86.4	Sept.	278.7	Oct.	0	Jan., Feb., March
Krakor	74.0	Sept.	296.6	Sept.	0	Jan., Feb., March, Dec.
Battambang	70.2	May	226.6	July	0	Jan.
Siem Reap	73.8	Sept.	257.6	Sept.	0	Jan.
Takeo	82.8	April	280.3	April	0	Jan., Feb., March
Kamport	65.4	Oct.	332.6	Aug.	13.4	Jan.
Sihanoukville	239.4	July	806.3	July	7.7	Feb.
KG. Cham	114.3	May	304.4	Jun.	0	Jan., March, Dec.
Stung Treng	262.6	Aug.	767.3	Aug.	0	Jan., Feb., March, Dec.
Snuol	98.2	Aug.	557.9	Aug.	0	Jan., Feb., March, Dec.
Prey Veng	80.2	Sept.	320.4	July	0	Jan., Feb.
Svay Rieng	104.5	June	357.0	Sept	0	Feb., March

風については、記録でみる限りでは全国的に穏やかである。第VII-2表に主要都市の過去1カ年の最大風速を示す。

第VII-2表 各地における過去1カ年の最大風速

(単位 m/sec)

場所名 \ 月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
Phnom Penh	10.4	6.2	9.8	6.2	7.2	9.8	8.3	8.8	9.8	8.3	6.2	4.1
Battambang	5.2	6.2	8.3	7.2	7.2	8.3	8.3	8.3	5.2	5.2	4.1	6.2
Stung Treng	4.1	7.2	8.3	8.3	7.2	10.4	7.2	6.2	5.2	4.1	4.1	4.1
KG. Cham	6.2	8.3	9.3	9.3	25.8	16.5	17.5	13.4	13.4	8.3	8.3	7.4
Sihanoukville	5.2	5.2	6.2	6.2	9.3	10.4	9.8	9.3	15.0	8.3	6.2	5.2

この表ではKG. Chamに25.8m/secという値があるほかは、すべて20m/sec以下であり、Battambangでは年間を通じて10m/secに達することがない。われわれ日本人からみると、にわか信じ難い値である。

なお、Bokorについては嘗つて中波放送局が存在していたが、土地が海岸を望む1,000mをこえる断崖上にあるため、激しい風雨と高い湿度にさらされるので、性能の維持と保守上

の点から現在はKepに移設されたといわれている。このBokorについては、風速や雨量の測定がなされておらず、その値を得ることができなかった。

次に、雷についての資料は正確なものがなく、各地で雷鳴の回数が記録してあるにとどまる。4月から10月の期間が多く、最も多いのでKampotの25回(5月)である。年間を通じてSihanoukville, Phnom Penhが少ない。

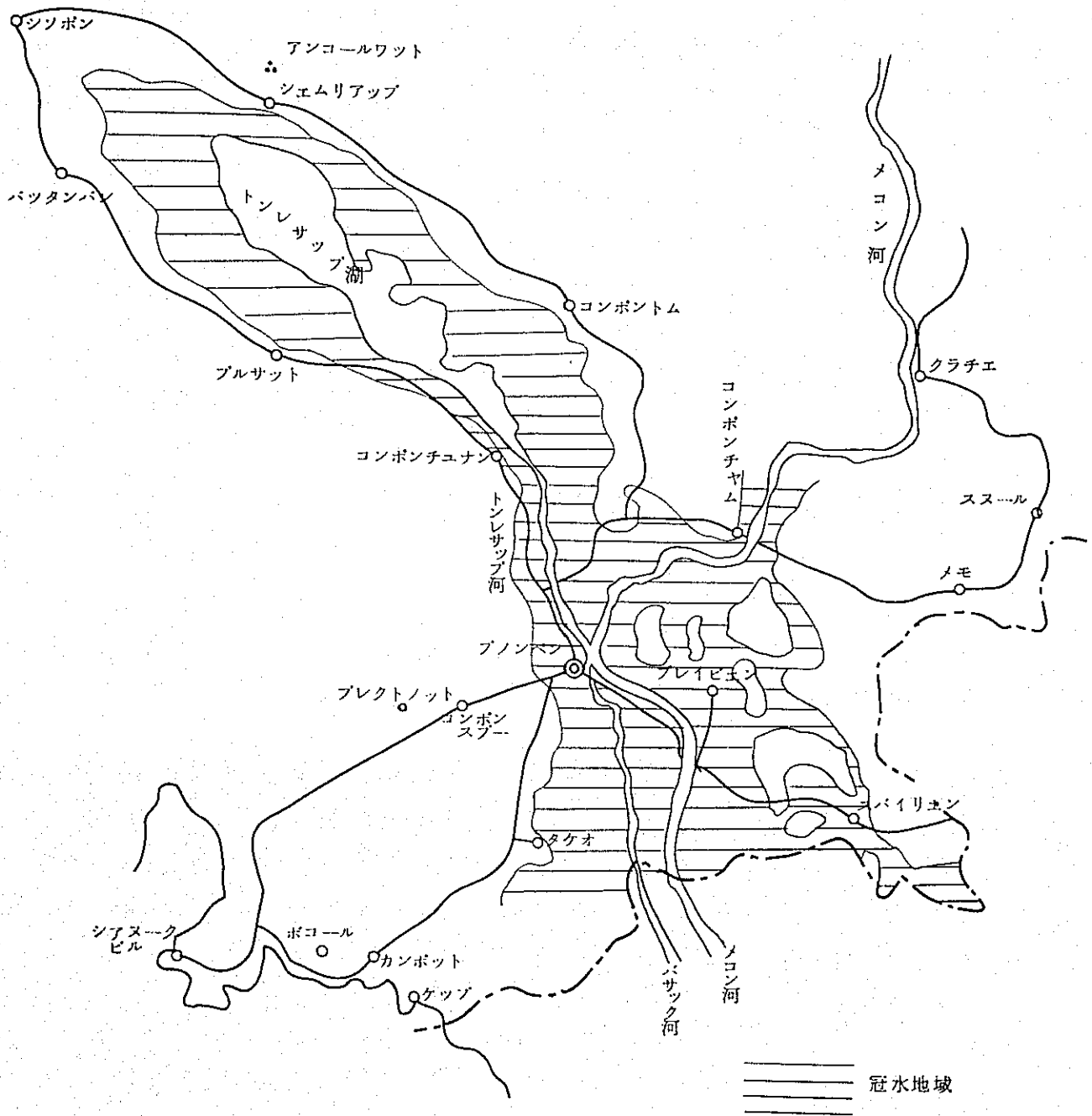
これら気象を概括すると第VII-3表のようになる。

第VII-3表 カンボディアの四季

季節	期間(月)	気 候
冬	12 ~ 2	北東の風が吹き、気温は比較的低くなる。雨量は極端に少なく、空気は乾き、しのぎやすい。
雨期まえ	3, 4	1年を通じて最も気温が高く、空気は乾いているが、日本人には耐え難いくらいに暑くなる。
雨 期	5 ~ 9	南西の風が吹き、雨量が急激に増大する。湿度はしばしば100%になる。雨期前にくらべ気温は少しさがすが、なお日本の盛夏の暑さで、梅雨期の湿気に相当する。
雨期あと	10, 11	雨がしだいに少なくなり、冬に移行して行く。11月中旬には、メコン河の水位が最高となる。

雨期から雨期あとにかけては、その源流チベットの雪どけ水と、中国南部、ラオス、タイ、ベトナム等中流流域の大雨を集めたメコン河は、流量が渇水期の20倍にも増大し、水位は10m以上高くなる。それらの水はPhnom Penhから2本の流れに分かれて海へ排水されるが、それでは間に合わなくなり、周辺の湖沼や田畑へ溢れ、さらにトンレサップ湖へとトンレサップ川を逆流し始める。湖はついには3倍に拡がり、湖岸一帯を泥沼と化し、渇水期には水深3mにすぎなかったものが、大型船も航行可能な10mをこえるほどとなる。

雨期のカンボディア中央平野は見渡す限りの水面に、点々と町や村が浮かび、盛り土された国道がそれらをまつく結ぶ。首都Phnom Penhも水に浮かぶ島と化する。なにしろ、メコン河が海までなお400kmを残しているというのに、Phnom Penh周辺の水田の海拔高は、僅か10m余りに過ぎないのである。これらの冠水状況を示す地図を公共土木省から得たので、第VII-6図に示す。



第VII-6図 雨期における冠水地域

2. 政治, 経済

2.1 政治

カンボディアは、アンコール時代の10世紀から13世紀までの約300年間は、カンボディア、ラオス、ベトナム南部、それにタイ中南部にまたがる大王国であつた。そして歴代の王は壮大な宮殿、寺院、王都等を次々と建設して行つた。しかし、それは諸国との戦乱の間になされ、国の財政は逼迫し、賦役を課せられた国民の心は離反し、国力は急速におとろえて行つた。

その後、シャムとベトナムの双方から攻撃され、領土をもぎとられ、アンコール王国は遂に王都を放棄し、遷都を重ね、Phnom Penh北々西30kmのOudong(ウドン)に都をさだめた。1864年、カンボディアは両国からの侵略を免かれるため、みずからフランスの被保護国となつた。首都はその3年後の1867年に、OudongからPhnom Penhへ移された。

カンボディアは第2次大戦後の1953年11月フランスの支配下を離れて独立し、1957年には中立法を制定した。その後、国境問題のため、1958年11月にタイと、そしてベトナム戦争における南ベトナム軍の侵入により、1963年8月に南ベトナムと、1965年5月にはアメリカとそれぞれ国交を断絶した。このうち、アメリカとは1969年6月復交した。

友好国は、フランス、ソ連、オーストラリア、チェコ、イギリス、スイス等であり、アジアでは、中共、シンガポール、日本、ビルマ、北ベトナム等であつた。

この国の政治指導者はシアヌーク殿下であつた。彼は第2次大戦後の20数年間、政権を担当してきた。国民議会と王国議会の他、年に2回開かれる国民会議(日本の1日内閣みないなもの)や、時おり行なわれる民衆接見を通じて、シアヌーク殿下は国民と接触していた。

シアヌーク殿下は一般国民の尊敬と期待とを一身に集めていると思われた。われわれも昨年12月27日から3日間開かれた国民会議で、その姿を見、その声を聞くことができた。

王宮横の広場の片側の舞踊場に、シアヌーク国家首席始め、各閣僚、地方の州知事等が居並び、民衆から選ばれた質問者は広場の反対側の、100m程もへだたつた炎天の壇上に順次立つ。一つの質問にシアヌーク殿下はながながと熱弁を振る。彼は非常な雄弁家で、われわれはラジオ放送でしばしばその声を聞いていた。シアヌーク殿下の演説に対し、広場の三方を埋めた民衆から歓声と拍手が湧き上がるのであつた。そのうちに熱狂した男女が柵を越えて、シアヌーク殿下めがけて広場を走り出すと、警備員がこれを追いかけて捕える。手足をばたつかせ、両者汗だくのところへ洋服を着た政府の高官らしい男が壇上から駆け寄りてきて、特に許されてその者は舞踊場の横で、まのあたり殿下の風貌を仰ぐことができる。不幸にして、広場のずつと手前で捕まると、忽ちにして手荒らな警備員につまみ出されてしまう。群衆はその都度どよめき見守るのである。

この国民会議は演出じみてはいたが、その場に接し、温和な民衆を見ていた限りでは、た

とえ、シアヌーク殿下が60日も国を留守にするという手ぬかりがあつたとしても、本年3月のクーデターは、われわれが予想し得ないものであつた。

2.2 経 済

カンボディアは農業国である。人口の80%が農民である。この国はメコン河の恩恵を受け、広大な平野と肥沃な土地、さらに豊富な太陽の光に恵まれ、快適な農業条件を有しているとはいえ、これらの諸条件を有効に利用し、活用する手段が講ぜられていないのが現状である。

しかしながら、カンボディア政府1968年発行の統計資料によれば、1967年度において、米は輸出総額の半分を占めている。これに次ぐものはゴムであつて、この2品目で全体の78%に達する。以下、とうもろこし、牛（水牛、肉牛）、木材、ごま、胡しょうの順となる。

輸出入品目別および輸出入統計を、第VII-4表および第VII-5表に掲げる。また、おもな貿易相手国別の実績を第VII-6表に示す。

第VII-4表 輸 出 入 品 目

(1967年度 単位：100万リエル)

輸 入		輸 出	
品 目	額	品 目	額
工業機械	390	米	1,284
鋼 鉄	277	ゴ ム	716
石 油	267	とうもろこし	147
薬 品	246	牛	90
電気機械	246	木 材	80
自 動 車	165	ゴ マ	63
鋳 製 品	145	胡 し ょ う	53
綿 製 品	131	Kapok egrem	45
酪農製品	106	乾いんげん豆	43
そ の 他	591	た ば こ	17

注： 1リエル = 6円50銭

第Ⅵ-5表 輸出入統計

(単位：100万リエル)

年度	輸入	輸出	差
1961	3,395	2,220	-1,175
1962	3,582	1,902	-1,680
1963	2,751	3,116	+ 635
1964	2,863	3,063	+ 200
1965	3,603	3,690	+ 87
1966	3,888	2,356	-1,532
1967	3,365	2,907	- 458
1968前期	2,239	1,439	

第Ⅵ-6表 主な貿易相手国別輸出入実績

(1967年度 単位：100万リエル)

国名	輸入	輸出
フランス	1,054	275
香港	165	553
シンガポール	371	285
日本	507	101
中国	307	231
セネガル	—	437
イギリス	151	95
南ベトナム	13	187
西ドイツ	110	70
アメリカ	90	76
チエコ	24	93
ユーゴ	81	—
ソビエト	52	23
北ベトナム	38	29

輸入実績は、なんといつてもフランスが圧倒的で、日本、シンガポールがこれに続く。輸出は香港、セネガル、シンガポール、フランスの順で、日本に関しては、5対1の割合でカンボディア側の輸入超過となっている。なお、この国の会計年度は太陽暦と同じく、1月に始まり12月に終る。

経済の実権はここでも華僑の手にある。

Phnom Penhの商店の90%はそれであり、残りの10%がクメール人(本来のカンボディア人)とベトナム人によるものだといわれている。国民1人当りの所得額は、年間約4,000リエル(26,000円)である。

ゴムはカンボディアでは新しい産業である。その栽培が始まったのは1921年であつたが、今やマレーシアに次いで世界第2位の生産量を有する。単一のゴム園としては、1万8,000ヘクタールで世界最大の規模といわれているものが、ベトナムとの国境近くのChupにあつた。K.G. ChamからKratieにいたる国道の両側に延々と続くゴム園を車で走り抜けるのに2時間もかかるほどであつた。小高くなつた所で眺めたゴム園は、見わたす限りゆるやかな緑のうねりをなし、はるかかなたで空に消えていた。ゴム園の所有者は、植民地時代から引き続きフランス人が多いという。各所のゴム園には、薬材散布用小型飛行機のための飛行場がある程である。

淡水漁では世界屈指の漁場であるトンレサップ湖と、それに続く河川、数限りない湖沼を有する水産物が、輸出品目の統計でははるか下位で、米の1%にも達しない。豊富な漁獲物の殆んどが国内向けの貴重な蛋白源として消費されているものと思われる。

鉱産物などの地下資源は極めて乏しい。

近代工業の開発は非常に遅れており、散在する工場は、すべてといてよい程、先進国の贈与または借款によるものである。紡績、紙、合板、ガラス(以上中共の贈与)、砂糖、トラクター組立、タイヤ(以上チエコの借款)、石油製精、肥料、製綿(以上フランス資本と合併)等のほかに、華僑系資本のゴム、乾電池の工場がある程度である。

Phnom Penhや他の幾つかの州都を除くと、電力事情が非常に悪いため、地方の工場は皆、自家発電装置を備えている。

2.3 電力事情

観光の目的でPhnom PenhやAngkor Wat(アンコールワット)を訪れる限りでは見逃がされるこの国の貧弱な電力事情は、現地調査で地方へ行くと、いやというほど認識させられる。

Phnom Penhをはじめ各州都の大きな発電所は、EDC(Electricite du Cambodge)が運営しているが、それ以外の町や村はほとんどが私営の小規模のものである。たんぼの中の粗末な小屋に1台のジーゼル発電機をすえつけ、夜だけとか、朝と晩だけ送電しているにすぎない。その容量も7kVAなどと小型のものが多く、樹木などを電柱に利用して配電しているものもあつた。配電のサービス範囲は狭く、町をすこしてもはずれることは、電灯の恩恵から隔絶されることを意味するのである。

電圧もまちまちで、Phnom Penh, Sihanoukville, Kampotが220V、他は110Vで配電されている。しかし、周波数は50c/sに統一されている。

電灯料金は一般家庭用では1kW当り4リエル(26円)で、日本の約2倍である。

第VII-7表に主要都市の発電所を掲げる。すべて、火力発電所であり、Battambang

第Ⅶ-7表 主要都市における発電容量

地名	発電機台数	発電容量合計	最大消費電力	備考
Phnom Penh	2	19,000 (kw)	— (kw)	
"	1	21,000	—	
Siemreap	5	1,600	900	
Sihanoukville	5	1,060	650	
KG. Cham	4	1,016	650	
Kampot	5	976	650	
Pursat	6	570	280	夜8時から10時 以外は低圧配電
Kratie	4	524	230	
KG. Chhnang	3	410	300	
Svay Rieng	2	396	270	
Takeo	3	384	200	
Prey Veng	4	382	150	
KG. Speu	4	336	230	
KG. Thom	3	241	180	
Pailin	4	190	100	
Stung Treng	3	165	76	
Peamro	3	100	48	
Battambang	5	1,400	—	

のフランス資本による民営のものを除いて他はEDCで運営している。Battambangも1970年12月31日で権利期限が切れるから、1971年からはEDCの経営になるものと思われる。

この国には水力発電所が1カ所、Kirirromにある。他に1970年完成予定というKamchay発電所(Kampot州)と、1972年の完成を旨として昨年10月着工したPrek Thnot(プレクトノット)発電所がある。

Prek Thnot発電所は日本がダム建設を担当していることで知られている。ダムは広々とした平原に2つの小山を間にはさみ、長さ13kmのアースダムを築き、完成後は9,400kWの発電所が出現する計画であつた。2つの小山を含めると約15kmの堤防であるが、大平原のわずかな傾斜地に水をたたえるのであるから、堤の最も高い部分で38mダム水位も海拔60mであるから、水面ばかりが広大で底の浅い、いかにも大陸的なものである。このPrek Thnotダムは、多目的ダムであり、発電のみでなく農業用にも供されるのである。

この国は豊富な雨に恵まれているが、それは雨期に集中し、乾期には雨が少なく深刻な水不

足が各地で生ずる。

Kirirom発電所も例外ではなく、Phnom Penhへの120kmを5kVの高圧線で結び、1万kWを送電している発電能力も、毎年3~4月には水不足から操業中止せざるを得ない。

調査旅行中、夜になって目的地へ着いたこともあったが、途中で次第にたそがれていく広野の中に立ち並ぶ家が、あかりもつけずに暗さの中にとけこんで行くのは、わびしい光景であった。闇の中でようやく石油ランプがともりはじめ、そのゆらゆらとゆれる光をみると、われわれもほつとするが、なお黒々とした影のみをみせる家の多いことは、生活向上の一番手に電力開発をあげねばならないと、重ねて認識するのであった。

2.4 交 通

この国の国内旅行には、鉄道、バス、乗り合いタクシー、船等の便があるが、一般にはバス、乗り合いタクシーの利用が大部分を占めている。

鉄道は狭軌で、Phnom PenhからPursat, Battambangを経てPoipet (タイとの国境の町)までと、Phnom PenhからTakeo, Kampotを通つてSihanoukvilleへ行く2路線しかない。列車本数も極めて少なく、Phnom PenhからBattambang方向へ4列車、Takeo方向へ2列車運行されているだけである。列車平均時速も40km余りであるから利用者は少ない。

国内幹線道路はすべて舗装されているが、全国的に2車線で、橋はフランス植民地時代に作られたままの1車線である。車の絶対数が少ないから、この道を自家用車もバスも常時100kmのスピードで突つ走る。Stung TrengからKratieへ帰る140kmは、途中で4台の車とすれちがつただけの、ジャングルとサバンナを切りひらいた長い長い道であった。

バスは進行方向に直角に長い座席がとりつけられ、車内を前後に往来する通路がなく、座席ごと右側にドアが付けられている。客は、満員になったら荷物と一諸に屋根にも登る。そこは、米袋やバナナや自転車がいつもこぼれ落ちんばかりに積まれるところである。

乗り合いタクシーは、すべてがフランス製のブジョーで、あの小型車に3列の座席を作り、少なくとも9人は乗っており、足の間や膝の上に身動きできないまでに荷物を積みこんで100km以上のスピードでとばすのである。

国道の中でただひとつ、Phnom Penh~Sihanoukville間の国道4号線は4車線である。これはアメリカの援助で数年前に完成したものでアメリカンロードと呼ばれ、週末に首都から海へ急ぐ人はSihanoukvilleまでの230kmを2時間で走破する。

メコン河、トンレサップ川を横断するフェリーボートは2隻ないし3隻でビストン輸送しているが、車は1度に6~8台しか乗らないから、渡しの両岸には長い列ができ、商店や露店が繁昌する。

渡し賃は乗用車が40リエル(260円)、単車は10リエルくらいで、人は1リエルで

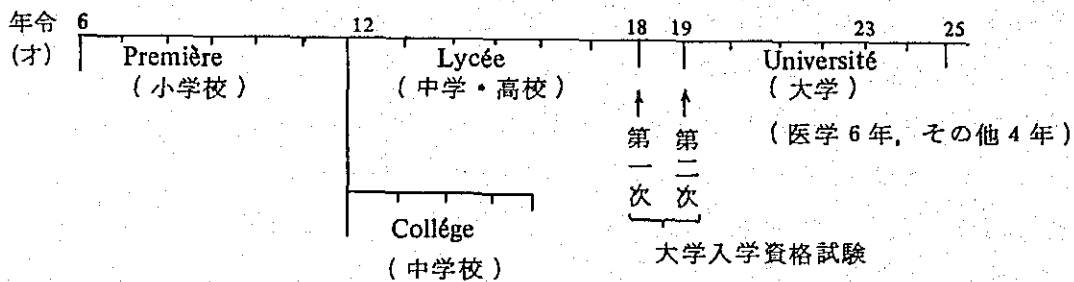
ある。後で述べるように、公用出張の車は無料で、しかも優先して渡してもらえる。

メコン河、トンレサップ川、バサック川は重要な交通路である。メコン河においては、年間を通じて海からKratieまで船の航行が可能である。Phnom Penhまでは5,000トンの海洋船も廻行可能で、日本でも3つの船会社が、各社毎月1回、貨物船を日本～Phnom Penh間に就航させ、繊維、機械、雑貨などを運んでいるほどである。これら大型船の岸壁と少し離れて、郵電省から歩いてすぐの船着き場には、Kratie, KG. Cham, KG. Chhnang行き等の船が頻繁に出入りしている。

3. 教 育

カンボディアは、第2次大戦後独立するまでは、フランスの植民政策上、若干の小学校があっただけで、中等教育以上の学校は認められていなかった。しかし、1957年の独立後、教育政策を強力に推し進めてきたおかげで、かつての85%という高い文盲率は、15%程までに下がっている。

カンボディアの学校制度は、フランスのそれをまねている。第VII-7図にその概要を示す。



第VII-7図 学 校 制 度

日本と同じく6才で就学する。学年の呼び方は、大学予科を除いてLycéeの後期から逆に数え始め、上から第1学年、第2学年と呼び、最低学年は第12学年となる。したがって日本の小学1年生は12年生、中学1年生は6年生、高校3年生は1年生に相当する。

Lycéeを卒業すると大学入学資格を得るための第1次国家試験があり、大学予科卒業後第2次の国家試験がある。これをパスして初めて大学に入ることができる。大学の修学年限は4年であるが、医学部のみは6年である。

学校と生徒数については第VII-8表のとおりである。

教科書は高学年になると殆んどフランス語で記述されている。数年前までは小学校の算数は低学年はカンボディア語、小学校6年生以上はフランス語のものを使っていたが、今は中学校まではカンボディア語である。

また、フランス語の課目も小学2年生から6時間もあつたが、現在は小学4年生からとなつ

ている。一方、英語は中学2年から選択科目として学ぶ程度であるから、この国におけるフランス語と英語の使用されている比率もやむを得ないものとして了解される。

第Ⅶ-8表 学校・生徒数

(1966年末)

学校・生徒の数	公立	私立	計
小 学 校	3,720	341	4,061
生 徒 数	803,766	42,415	846,181
リセー	23	30	53
生 徒 数	41,491	8,719	50,210
コレージュ	87	10	97
生 徒 数	36,798	719	37,517
大 学	9	0	9
生 徒 数	7,660	0	7,660

小学校の授業時間は、真昼をさけて、午前7時から11時までと午後2時半から5時までの2回にわたっている。

4. 人種と人口

カンボディアの人口は約680万人である。日本の北海道よりすこし多い人間が北海道の2倍余りの土地に住んでいるのである。人口密度は1平方kmあたり37人となる。

1962年の国勢調査によれば573万人で、政府統計は毎年2.2%の増加率を見こんで、1968年まで計算しているが、これを1970年まで延長すると683万人に達する。

フランス統治時代からの人口の推移は第Ⅶ-9表のとおりである。平均寿命は44才と低い。人口は高い増加率のもとに25~30年ごとに倍増していく。

第Ⅶ-9表 人 口 統 計

年	人口(人)	備 考	年	人口(人)	備 考
1900	1,102,000		1951	4,374,000	統計による
1914	1,823,279		1958	4,740,000	"
1921	2,402,585	国勢調査による	1961	4,845,000	"
1926	2,535,000	"	1962	5,728,800	国勢調査による
1931	2,803,000	"	1965	6,115,300	
1936	3,049,000	"	1968	6,527,800	
1941	3,471,000		1970	6,830,000	
1946	4,137,000				

80%以上の人が全国の $\frac{1}{3}$ にあたる平野部に住んでいる。中央平野は人口密度が最も大である。広大で肥沃な農地がそこにある。

本質的に農業国であるカンボディアでは人口の大部分が村落に住んでいる。これに反し、都市部に住んでいる人の多くは外国人である。即ち、中国人、ベトナム人および中国人とカンボディア人との混血たちである。

カンボディアにおける民族のうち最大なものはクメール人である。その比率は全人口の $\frac{5}{6}$ を占める。クメール人は一方において王族、僧侶、政府高官としてこの国の支配層を形づくっているが、大部分は生まれながらの農民である。彼らは水田のなかのヤシ林に囲まれた農村に住み、田畑を耕作してそこで死んでいく。

クメール人は一般に性格は温和で人がよく、楽天的である。彼らは意欲的に働くということが少ないようである。この民族の祖先が、あの壮大、華麗、そして精巧なアンコールの遺跡群を築きあげたとは容易に信じがたい。一時はインドシナ半島全域に威をふるったクメール帝国の子孫は、いまニツバヤシの葉で屋根と壁を作り、小さな高床式の家に住んでいる。飢えることを知らないこの国の豊かな自然の恵みと、熱帯の気候は、民族の活力を消耗させていくのであろうか。

Phnom Penhの中心部に大きなドームをもつ中央市場がある。ドームから4方向へ張り出しがあり、それぞれ穀物、肉、野菜、雑貨というように分類されている。

中は買い物の市民でいつも雑踏している。かつて、シアヌーク殿下がカンボディア人に商業への道をひらくために、この中の数百の店の権利をカンボディア人に与えたが、数年を経ずして、ほとんどが中国系カンボディア人か、名義だけはカンボディア人とした中国人の手に渡ったという。

かつての支配者フランス人は植民地時代の遺産を継承して、ゴム、コンショウなどの大農園の経営者となり、あるいは貿易業者、高級会社員、教育者とどとなつて社会の上層部にどまつている。

中国人は、フランス人とカンボディア農民との中間に位置している。50万人とも60万人ともいわれる華僑はこの国の流通機構をにぎつて、国の隅々まで浸透し、もみの集荷、仲買い、精米あるいはトウモロコシ、コンショウ、干魚などの集荷、輸送、販売を一手に引き受けている問屋、小売り商である。

ベトナム人は、フランス統治時代、器用で仕事熱心なことを買われてフランス人に重用された。当時カンボディアにやってきたベトナム人官吏は職権を利用して、土着の民族を圧した。現在カンボディアに残る40万人といわれるベトナム人は水産業、小工業、水上運輸業などに就いている。メコン河、トンレサップ川、トンレサップ湖やその他、大小の河川、湖沼に舟や竹の筏を浮かべて、その上に家を作っているのは、例外なくベトナム人である。

カンボディア人の、ベトナム人に対する長年の劣等感と反感は、われわれの実地調査中にも、ときどきカンボディア人の口からうかがい知ることができた。

カンボディア人は、カンボディアの国力がタイやベトナムより劣つてはいるが、ラオスよりはすぐれていると考えているし、ラオスには負けられないという信念をもっている。

カンボディアでは首都 Phnom Penh の他に 10 万人を越える都市はない。主要都市を人口の順に並べると、第Ⅶ-10 表に示すとおりとなる。人口はいずれも 1962 年の国勢調査をもとにして、1970 年現在を推定したものである。

第Ⅶ-10 表 主要都市の人口

(単位 千人)

	都 市 名	1962年	1970年
1	Phnom Penh	394.0	470.0
2	Battambang	38.8	46.3
3	KG. Cham	28.5	34.0
4	KG. Chhnang	13.0	15.5
5	Kampot	12.7	15.2
6	Kratie	12.1	14.4
7	Pursat	12.1	14.4
8	Svay Rieng	11.3	13.5
9	Siemreap	10.3	12.3
10	KG. Thom	9.5	11.3
11	Prey Veng	8.9	10.5
12	Kep	7.7	9.2
13	KG. Speu	7.3	8.7
14	Takeo	7.3	8.7
15	Sihanoukville	7.1	8.5
16	Stung Treng	3.4	4.1

表によれば、Phnom Penh は 47 万人であるが、町続きの隣接地域や、ここ数年間の急激な人口の流入から、ほぼ 60 万人といわれている。

また Sihanoukville は、この国の海の玄関として急速に発展しつつあり、港湾地区、工業地区、商業住宅地区、別荘地区等と整然とした都市計画に基づいて建設されており、現在の人口はこの表の値を大幅に上回っているものと思われる。

5. 宗 教

カンボディアにおける宗教は、ごく一部を除いて小乗仏教である。2,800 の寺院、7 万人の僧侶とその数は多く、大平原にボンボンと点在する丘陵の頂には、例外なくバゴダ(寺院)があり、無線局置局調査に登ったわれわれは、だいたい色の布を身にまきつけて、何をす

るともなく坐っている穏やかな顔立ちの僧侶達に、幾度となく出会った。

小乗仏教は、僧侶自身の戒律を重んじ、きびしい修業をしている。僧職者には飲酒妻帯は許されない。これらの僧侶は生き仏として人々から敬われ、国王や富豪の帰依者から多大の寄進を受けるが、自己の修業のみに専念して、他を教化するとか、おのれを空しくして全体に奉仕するとかいうことはない。たくはつに出るにしても単独行動はなく、複数できちんと並んで歩き、互いが身を慎しみ合うものである。

また、その思想によれば、富者が富の一部を貧者に与えるのは当然のことであり、それによつて善行ができ、富者自身が救われるのだという。僧侶のたくはつにおいても、深々と頭を下げるのは坊さんではなくて、食事を提供する人々である。先進国が後進国に与える援助もそのように受け取られることが多いという。

男子は成年になる前後には、頭をまるめて僧衣ままとい、数カ月は僧侶としての生活を送る風習があつたが、現在はほとんど残っていない。

この小乗仏教は、セイロン、ビルマ、タイ、ラオス、カンボディアに深く根をおろしている。

6. 調査中の出来事

第I章で述べたように、今回の第1次調査は政府関係機関との基本的事項についての打ち合わせと、全国の各置局候補地点の実態調査という基礎的な調査に重点が置かれた。カンボディア王国19州のうち、辺境を除く15州(うち、14の州都を調査)に足跡を残したのである。

調査期間中は、ステーションワゴン2台(うち1台は運転手を含めてカンボディア郵電省から借用)とジープ2台を使つてキャラバンし、調査団員6名が3班にわかれ、調査内容と各人の健康状態を考慮しつつ、適宜その班構成を替えながらハードスケジュールを消化していった。したがつて、これら自動車による全調査行程は6,000kmにもおよんだ。

実地調査は3回に大別して行ない、各回とも政府の職員2名が公用出張命令書を持つて同行し、各地方の州知事、郵便局長との打ち合わせや実地調査に活躍してくれた。カンボディア語で書かれている出張命令書はわれわれにとっては身分証明書のようなもので、各調査団員はそのコピーを常時携帯していた。メコン河のフェリーボートなどは、公用出張命令書を見せると、一番先に、しかも無料で渡してくれるなどその威力はたいへんなものであつた。

カンボディア王国の州知事は、その地方の行政権と警察権を持つ権力者で、現在でも町で一番りつばな、旧仏領時代に建てられた知事公邸に住んでおり、そこを訪れ、広々とした大理石作りの部屋などに通されると、昔の支配階級の生活が想像され驚かすにはいられなかつた。それに反して州庁の庁舎は知事公邸と比較すると格段に見劣りがするのである。また地方の郵便局長はその地方の名士らしく、非常に親切でこまごまとわれわれの世話をしてくれたし、山登りまで一緒にしてくれた人もいた。

第1回目の実地調査で、ラオスとベトナムに近いStung Trengルートの調査に行つたとき、団員2名、政府職員1名、ジープの運転手1名、合計4名の班が置局候補地点に近づく

ためジープでジャングルに入りこんだところ、そこが立ち入り禁止区域であったことからカンボディア陸軍の兵士につかまり、Stung Trengの軍司令部まで連行され、簡単な取り調べの後釈放されたという事件(詳細は次項参照)が起き、前途多難を思わせた。しかし、その翌日急ぎPhnom Penhに帰り、日本大使館およびカンボディア政府関係者とよく相談した結果、それ以後は、実地調査の際は、まず第一にその地方の州知事にあいさつし、置局候補地点への登山の可能性、危険の度合いなどを確かめ、立入り許可をもらい、必要なときは軍隊や警察に護衛を頼み、しかも現地ですっかりした案内人をあつせんしてもらいなど万全を期したので、それ以後は安心して調査をすることができた。旧フランス軍の監視所があつた標高430mのPh. Dambok Khpos(Kampot州)に登つたときなどは、団員4名の班に兵士14名の護衛がつき、政府職員、案内人、ポーター等を含めて30名をこえる大部隊になつたりした。

カンボディア軍については最近の報道でよく知られているが、各地区の兵營あるいは駐屯地の敷地内に彼らは家族と一緒におり、時には豚や鶏をも飼つて暮らしている。

置局調査中軍隊に逮捕された事件の記録 (業務日誌より)

1969年12月20日

- 7時30分 KratieのバンガローからStung Trengに向けて出発した。
- 8時30分 Sre Sbovにて2班に分かれ、第1班(中野、宮津、ゴー・ホン・ブーTV技術部長)はPhnom Lopeakの調査に向い、第2班(五十嵐、十一家、ノル・シルン搬送課長)はPhnom Namtong, Phnom Kandie, Phnom Dei Krahamの3候補地に向つた。以下第2班の行動を記録する。
- 9時35分 Phnom Namtong方向の道路を発見した。附近には人家がないので、案内人をたのむことも出来ず、我々だけがジープに乗り替えて山麓まで到着し、附近の状況を調査したが、山に登る道が不明なのでそのまま幹線道路まで引き返した。
- 第2班のもう1台の車(郵便省のステーション・ワゴン)は、人通りの少ない道路上で待っていることは危険だということで、既に最寄りの部落で待機すべく、Stung Treng方向に向け移動していた。
- Phnom Kandieは、とうとう幹線道路から入る道が見つからず調査できなかつた。
- 10時30分 ジャングル内に、Phnom Dei Krahamに至ると思われる道路を発見したので、ジープで入つた。約700m入つたところで、自動車が通行可能な道路がとぎれたため下車し、附近の状況を調査中、20~30m先に、山小屋を発見した。その小屋から1人の若い兵士が出て来て、銃をつきつけて

きた。同行した郵電省のノル・シルン搬送課長が色々説明したが、こちらの言い分をわかってもらえなかった。課長は顔色も青ざめてきて、どうしようもないというような身振りをし、我々の質問に満足に答えてはくれなかった。我々の驚きもさることながら、兵士もかなり緊張しているようであった。兵士は上半身は裸で、我々はつきりベトコンにつかまっただと思っただ。それから我々4人(運転手を含む)は、ジープを放置させたままジャングルの中を幹線道路まで歩かせられた。その間兵士は銃を持って我々の背後におり、ジャングルの中で一度発砲した。これは他の兵士に対する合図か、それとも威嚇射撃かはわからない。蛇や猛獣がいつ飛び出して来るかもしれないと本当に生きた心地がしなかった。幹線道路に出て検問所(Stung Treng 方向へ約6 km)に向って歩かせられている途中さらにもう一度発砲した。300~400m行つたところでもう1人の兵士に出会つた。その兵士が運転手をつれてジャングルの中にジープを取りに戻つた。

1 1 時 3 0 分頃

その間に第1班が通りかかつたので、これを止め、合流した。第1班の人達も事件のあらましをきいてびっくりした。ジープが戻ってくるのを待つて、全員は2人の兵士と共に検問所に車で向つた。その時には兵士達はちゃんと制服・制帽をつけていた。

検問所では我々がジャングル内に入った理由等を説明したが、ここでは解決がつかず、Stung Trengの軍司令部に出頭せよとの指示により、Stung Trengに向つた。これで兵士達がベトコンでなく政府軍であることがわかつて、すこし安心した。この検問所はStung Trengへの国道とRatanakiriを経てベトナムに入る国道の分岐点にあり、約120 kmも行くとベトナムとの国境線につくのである。ここにかんじょうなゲートがあるところをみると、この検問所が実際上の国境線となつているのかもしれない。

1 2 時頃

Stung Trengの司令部ではLay Phoc司令官に会い、調査目的等ジャングルに入った事情を説明した。彼の話によれば、我々の入つたジャングル地帯は立入禁止区域になつていて、そこに入るためにはブノンベンの参謀本部(Etat Major)の許可が必要であるとのことであつた。我々が入つたことに対しては、ジャングに入った者の氏名とその理由を記録し、そのほか特に問題にもせず、すぐ釈放してくれた。立入禁止区域とは言うものの、それを示す標識があるわけではなく、参謀本部、地方の軍司令部、州知事など関係者が知つているだけらしい。一般の人達は幹線道路から離れてジャングルに入る必要性などないし、象や蛇など動物の危険もあるので近づかない様である。

1 2 時 3 0 分頃

以上でこの事件は一応解決したが、約2時間にわたつてあちこちと引つぱり廻され、それに精神的な緊張も加わつて、釈放された時にはほつとすると同時にどつと疲れを感じた。

7 その他

7.1 国の祝祭日

カンボディアには年4回の正月があるという。

その才1番目は太陽暦の元旦、才2番目はいわゆる旧正月、才3番目は華僑だけのお祭り、そして最後がクメール人の正月で4月13日から3日間行なわれる。このうち4月の正月が最も賑やかで、北半球にありながら、1年中で一番暑い季節に人々は正月を祝うこととなる。太陽暦の正月は元旦に官庁が執務をやめるようで、大みそかも、1月2日も平常勤務で街の風景もどうということはない。

才VII-11表は昨年11月発表された1970年の祝祭日の日取りである。

このうち、「Sangkum記念日」というのは、1955年政治はもとより国造り、人作りなど幅広い目標をもつて作られた人民社会主義共同体(Sangkum Reastr Niyum)の記念日のことである。シアヌーク殿下はこのSangkumの総裁でもあった。祭日が日曜日と重なるとその埋め合わせに次の月曜日が休日となっている。

7.2 官庁の執務時間

カンボディアにおける官庁執務時間は、午前7時30分から午後1時30分までの6時間である。人々は暑い日盛りを避けて、早朝から起きだす。中央市場も午前5時から6時までの間が最も賑わう。そして昼過ぎには昼寝をする習慣がある。

Phnom Penh市内には一旦シャッターをおろす店もある。

官庁で人が揃うのは9時頃のようにである。だから執務時間は正味4時間程で、調査団が政府機関と打ち合わせをしたいと思つても、1日に1機関がせいぜいで、日本におけるように午前と午後に分けて、何か所かをかけ廻るということとはできない。

前もつて先方の都合をきいても、たいていは、「なん日の10時」とか、「11時」というような時間になり、その打合せで1日が終り、あとは調査団員のための討議と準備と整理の時間となる。日本人からみると毎日土曜日みたいなもので、コロンボ計画による日本人専門家も、着任当初は誰しものがこの勤務時間に驚くが、2か月もすると自分も周囲に同調して昼寝をしないでは体調が保てなくなるという。

しかし、気象条件の同じようなタイや南ベトナムが、日本と大差のない勤務時間を定めているのと比べると、カンボディアの労働時間について一考の余地があると思われ、この国の経済力が貧弱なのはこの勤務時間の短かさと全く無関係であるとは言い切れないような気がする。

7.3 器材の引き取りと地図の購入

航空貨物として送つた調査用器材の引き取りについては、税関長のサインがあれば問題ないときいたので幾度となく足を運んだ。明日の11時という約束をしてその時間に行つても、長い間待たされたり、肝腎の当人が不在だったり、また出張していたりして結局は夜自宅まで出掛けて数日かかりで漸く目的を果たした。

税関長のサインをもらつたあとは半日もかからず、残り十数個のサインを得て器材を引取ることができた。また地図の購入についても同様の努力を重ねる必要があつた。

マイクロ回線の設計には5万分の1の地図が不可欠であるが、日本を出発する前はカンボディアで購入することができるかどうか非常に心配であつた。幸なことに米軍が全国の5万分の1の地図を作つており、カンボディア陸軍がそれを管理していたので、調査目的を充分説明し、購入することができた。しかしその分類整理が充分でないため、一度では部分的にしか買うことができず、十数回足を運んでやつとルート上の必要なところをほとんど揃えることができた。地図1枚の値段は5万分の1の地図が100リエル(650円)25万分の1の地図は80リエルと非常に高価である。

7.4 食事のこと

カンボディアでは、どこへ行つても食堂は中国人もしくは中国系カンボディア人の経営と考えてよい。したがつて中華料理店の数が非常に多く、ふところしだいでフカヒレスープや、つばめの巣などから始まる高級料理から、焼そば、チャーハン、おかゆなどに至る各クラスの店を選ぶことができる。なにしろ毎日の食事のことなので、なじみの高級食堂(冷氣庁房 富麗堂皇 名厨主理…などと箸袋に印刷してあつた。)も2、3できて、ボーイはわれわれの好みもわかり、日本語で注文してもよい程になつた。店によつては、いつもレコード音楽を流し、われわれはカンボディア語や、中国語の歌の間に、水色のワルツ、雪の降る町、上を向いて歩こうなどをメドレーで聞きながら食事をすることができた。主食はパンでも、御飯でも注文できる。御飯は日本と比較すると、細長く固めでバラバラして初めは口に合わなかつたが、次才に馴れてきて、田舎廻りをするようになってからはカンボディア料理が多いことから、パンより御飯がよく合い、どんどんお替りをするようにさえなつた。Phnom Penhでは朝食は15-30リエルぐらいで済み昼夜の定食はスープ、魚、肉にコーヒー、果物(パイナップルかバナナ)付きで70リエルであるから安いものである。一品料理は20-60リエルぐらいで、種類も豊富である。

田舎では土地の郵便局長に案内してもらつて、その町の定評ある店で自慢の料理を賞味することとなる。田舎は特に蠅が多い。「蠅もいないような店では、うまい料理が出るはずがない。」と聞かされるとなるほどと思うようになつた。左手で蠅を払い続けながら食べる田舎料理には、サラムチューを始めとして懐かしい名が幾つも思い出される。

食料品で高いのは酪農製品である。バター、チーズはすべて輸入される。食堂でバターを頼むと、日常見かける半ポンド製品を厚さ5mmぐらいに切つて12リエルである。

牛乳も日本の3倍ぐらいの値段である。リンゴは日本からの輸入品らしく、長野や山形の箱が露店の台に使われていたが、1個40-50リエルであつたのには買う人がいるのかと、かえつて心配になつた。

外国に行くとき生水を飲めないのが不便であるが、Phnom Penhでも生水をさけて、コココーラ、ジュース、ビール、支那茶などを愛用していた。

ビールやジュースを冷蔵庫で冷しているのは高級なレストランだけで、普通の店ではジョッキ程の大きなコップの中に大きな氷のかたまりを入れておいて、そこへ棚からおろしたなま暖かいビールを注ぐと、氷はみるみるうちに溶けて手ごろな冷たさになる。

ビールのオンザロックというところである。初めの頃は氷も生水から作っているのであろうから危いと考えて、ボーイが氷を持って廻ってくるとあわてて断わっていたが、暖いビールやココラには閉口し、4、5日たつと氷ももらい始め、その氷が溶け切らないうちに急いで飲むこととした。そのうちに次第に体が馴れてくると、やがては氷を請求する程になつてしまつた。このビールは、1969年春から国産化された660CC入りで、値段は店によつてバラツキがあるが、30リエル前後である。

われわれが接触したカンボディア人は、そのほとんどが下戸で、戸外ではもちろん、レストランやバーに行つても酔つ払つた人を見ることはついになかつた。

パヤリスオレンジやフアンタは8リエルであるが、100年前までの首都Oudongの遺跡を訪ねた時のフアンタは、山の上でも、山の下でも7リエルで、運び上げる労賃は勘定に入つていないようである。

7.5 ホテル

この国の宿泊設備は快適とは言い難い。Phnom Penhにおけるわれわれの常宿ケラホテルは、冷房付き、シャワー付きで一応は5指の中に入るが、難点は戸外からの騒音である。もともと風通しをよく作つてあるところに、あとから冷房装置を付加し、無理に気密にしたところなので防音が行きとどかず、どうしようもなかつた。

中央市場に近いホテルの前の大通りを、早朝から往来するオート三輪の乗り合いタクシーのかなり高い排気音に馴れるにはかなりの困難を伴つた。しかし、ボーイは人なつづく親切であつた。室によつて異なるが、宿泊料は7ドルから10ドルの間である。

Phnom Penhで最も高級なロイヤルホテルは、外観はその名のとおり素晴らしいが内部は古風で、備え付けのバスルームもお湯を出しておいて、しばらくして「さあそろそろ入ろうか。」と湯加減をみると、まるで水風呂なのでびつくりする。ヒーターの容量が小さいのである。それでいて宿泊料も、ホテル内の食堂も町の1.5倍の値段である。

しかし、このホテルだけがプールを持っていて、ビキニの金髪美人と並んで甲羅(こうら)干しを出来るのが取り得であろうか。地方の小さい町には、その昔フランス人官吏用として作られたバンガローと称する国営のホテルがあるが、外からの眺めは昔の面影を保つてはいるものの、内部設備は数十年來のままでトイレはよごれ、冷水シャワーも出ないところがあつた。しかし、どこでもシーツ、枕カバーは洗濯したきれいなものがおいてあり南京虫が出るなどという所はなかつた。ただ、蚊が多いので蚊取り線香、殺虫剤等は必ず持参しないと一晩中眠れない恐れがある。殊にKratieのバンガローの蚊はすごく、目をつぶつて手をグルリと一振りしても、から振りに終ることはあるまいというのが幾人かの一致した意見である。その他に中国系人の経営による支那宿と呼ばれるもの(看板に

大旅店とある。)がある。これはバンガローと違って比較的人が泊っているようである。値段はバンガローも支那宿も Phnom Penh の半分程度である。

例外として、Siهانoukvilleのアンデバンダンホテルと、モートルとが挙げられる。ここは設備も環境もよく、窓から暮れなすむ熱帯の海を眺めおろした旅情は忘れ難い。また、Battambangのサンケホテルも落ちついたよい宿であつた。

Siemreapでは食事と休憩に立ち寄つたアンコールワット正面のオベルジュ・ド・テンプルが、先頃戦火に遇つたようで、また建設中だつたアンコールホテルも作業半ばにして放棄を余儀なくされているものと思われる。

7.6 日常生活について

カンボディアへ行ってまず意外に思つたことは、人口60万の首都に郵便局がたつた一つしかないことであつた。そして郵便切手は郵便局でしか買えない。ポストも局内にあるだけと聞いたので、投函はチョイト散歩がてらに…というわけにはいかない。しかし、帰国する頃になつて町の南部に才2郵便局があつて、そこでも切手販売をしているようだとか、中央市場近くに公衆電話と並んでポストもあるということがわかつたが、どの程度利用されているかわからなかつた。

郵便局の窓口には女子職員が居並んで対応してくれる。切手を買に行くときによつて違う種類のものを取り出して見せてくれる。だから一通りそろえるためには何度か通つて、「0.5リエルから10リエルまでのを全種類見せてほしい。」と依頼しなければならない。やがて顔なじみになると、切手シートごと取り出してくれ、「好きな枚数だけ切るように。」と言う。何シートかにわたつて幾十枚かの切手を切り取つているのを、彼女はカウンターの向うでじつと見ているが、「合計395リエルです。」などと立ちどころに言うにはびつくりした。というのは一般にカンボディア人の計算はのろい。彼らの計算は10進法ではなくて、5進法なのである。つまり、1.2.3.4.5と数えたあと、6からは5+1、5+2、5+3、……、10+1、10+2、……、10+5、10+5+1、10+5+2、……となる。おそいだけでなく誤りもしがちである。

最初の現地調査の才1日目に、昼食代のおつりが少ないのを、あとでふと気付いた。同行した日本人専門家は「それは計算違いをしたのです。決してごまかしたではありませんよ。」と説明してくれたが、本当にそのとおりで、ホテルの支払いでも腹だたしいくらいに手間どることがあつた。

カンボディアの通貨はすべて紙幣である。1、5、10、20、50、100、500リエルがその種類で、米ドルとの交換レートは公定が1ドルあたり55リエルである。

人々はあまり財布を使わないようで、直接お札をポケットに入れている。紙幣の数字は、1か所のアラビア数字を除いてカンボディア語であるため、初めは見分けるのに苦心した。馴れるにつれ、色と大きさで簡単にわかるようになった。かなり少数ではあるが、戦前の紙幣が通用している。例えば仏領印度支那時代に発行されて、現在の南北ベトナム、ラオ

ス、カンボディアで使用されていた100ピアストル紙幣が100リエルとして今も通用している。この紙幣の表には民族衣装をつけた3か国の娘さんがえがかれている。これら3か国のうち、通貨単位としてピアストルを採用しているのはベトナムだけであり戦後各国の貨幣価値が変動しているが、なお当時のままに通用するところが面白い。カンボディアの気候は人間生活には必ずしも好ましいとはいえず、むしろ病原菌の繁殖に適している。沼沢の多い平野や高地の澄んだ水にはマラリヤが発生する。しかし、それも人間が住みついて水が濁ってくるとマラリヤの心配はなくなる。したがって、泥水のメコン河流域にはなく、KirirromからSihanoukville方面への調査には注意が必要である。デング熱の媒介も蚊によつてなされるが、これは4日ぐらいでなおる。コレラはエルトール型であるが、マンゴーの花の咲く5月頃にはやり、12月、1月はまず心配ない。蛇は5種類の毒蛇がいるが、こわいのはキングコブラである。最近はあまり見かけないようで、日本の援助で作られたMongkolBorei(モンゴールボレイ、パタンバン州)の医療センターには青蛇の血精が置いてある。医療センターは、国の予算が少ないので会計年度の終わり頃には金が足りなくなり、重油も電気もなくなると町の金持が寄付をしてくれるという。

医療センターにはコロンボ計画により日本人医師が専門家として派遣されているが、PhnomPenhにおいてはソ連の援助による立派な病院が市の南の端にある。一般開業医は中国系が多く、診察料は200リエルと高い。医薬分業であるから、処方箋をもらって薬局へ行くこととなる。

街の交通機関としてはシクロか、オート三輪の乗り合いタクシーが利用される。バスは市内用ではなく長距離用である。シクロは前に客をのせ運転手は後ろからペダルをふむ輪タクである。運転手に言わせると、標準値段は1Km5リエルとのことであるが、交渉次第らしい。カンボディア人は安く乗っているようで、日本人用、その他外人用などと幾段階があるようだ。ホテルの前にはたむろしているシクロの運転手は新しい泊まり客とみると、しつこくついてくる。「気を付け」「敬礼」などのほか、片言の日本語も話すから愛嬌がある。人々はおとなしくて、暴力シクロなんていうものもないから、深夜1人で街を歩いても身の危険は全くない。夜おそい裏通りには1日の労働を終えたシクロがズラリと並んでその客席に身を丸くした運転手が早い夜明けまで窮屈な姿勢で仮眠をとっている。シクロの運転手は床屋さんと共に、カンボディア人にしか免許されないという。なお床屋さんは散髪だけを15分だらいで済ませ、代金は20リエルである。日用品については、カンボディアへ出かけるにあたって現地でじゅうぶん手に入るのかと心配であつたが、来てみれば商店は豊富な品数を並べ、市場の廻りの露店でもこまごまと各種の品を売っていた。

7.7 アンコールの遺跡

カンボディアを訪れた人は、必ずといってよいほどアンコールの遺跡をたずねている。

逆にアンコールを訪れるためにカンボディアに行くといった方が適切かもしれない。

カンボディアの国旗は横3段のしま模様で、上下は紺、中段が赤でその中心にアンコールワットの図が白抜きになつている。これは、カンボディアがアンコールワットの国であるという誇りを示しているといえよう。アンコールとアンコールワットは混同され易いが、アンコールワットはアンコール遺跡の中で最も有名な寺院の一つなのである。

アンコールの遺跡は、十数キロ四方に及ぶ広大な敷地に無数の巨大な石造建築が点在し、そのスケールといい、彫刻のすばらしさといい、見る人を圧倒せずにはおかない。

アンコールが、他の世界的な遺跡よりもいつそう神秘的であるのは、9世紀に建築を開始し14世紀に滅びてから、1861年フランスの博物学者アンリ・ムオが標本採集のためジャングル踏破旅行中にアンコールワットを発見するまでの約500年間、ジャングルの中でじつと眠り続けていたということである。この偶然の発見の後、その付近からアンコールトムをはじめ、数十の殿堂の遺跡が発見された。しかしこれらの遺跡は大じや(蛇)の大群のような熱帯樹が巨大な石の屋根、石の柱、石の壁にからみつき、抱きあげ、押し倒し、全くみじめな状態にあつた。その後フランスは考古学的調査研究と遺跡の修復に本格的に取り組んだのである。

アンコールワットは、王都・寺院の意味である。しかし先租代々の王のためのものではなく、王一代のための寺院である。外周は、東西1,500m、南北1,300m、各辺が正確な方位を定めており、直線と直角の正確な位置関係をもっている。一番高い中央塔の高さは34m、使用石材はなんと22万立方mといわれる。石はここから東北40Kmのクレン山から切り出され、運び易いように石に小穴をあけ、水運を利用して運びこみ、テコの原理を応用して、やぐらで積み上げたと考えられている。オ2回廊から地上25mのオ3回廊にいたる石の階段は急峻である。13mの高さをわずか38段の階段で、しかも、45°以上の急傾斜である。登りは夢中で登つても、いざ降りるとなると目まいがしたり足がすくんだりする。アンコールワットの中央の聖堂まで登るにはこのような関所を通らねばならない。このアンコールワットにある幾つかの有名な落書きの中に、森本右近太夫という日本人のものがある。寛永9年(1636年)とはつきり書いてあり、その当時よくそこまできたものだと感嘆せずにはいられない。

回廊の石壁には、軍兵の行進やクメールの美女など、絵巻物を思わせる浮き彫りが延々と続いている。アンコールワットの北側にアンコールトムがある。これは大王都の意味で、四面に顔の彫刻のある巨大な石塔群で有名なパイヨン(納骨堂)を中心に、願王のテラス象のテラス王官などを配し、クメール王朝の最盛期にあたる12世紀から13世紀にかけてのみごとな建造物がある。遺跡の群れから北東へ約10Kmのところ、パンテアイスレイがある。ここは女のとりで(岩)という意味で、数多くの柱や壁にふくよかな美しい女神の像があり、非常に印象的であつた。しかしそれと対称的に男性のシンボルでリングと呼ばれるものが、参道の両側にみごとな列をなしているのも興味の湧くところである。

アンコールの遺跡の西側には、いまも当時の大人造湖東西8 Km、南北2 Km、が残っている。乾期になると1滴の水も貴重になるほど水の欠乏をきたすこの国では、かんがい（灌漑）その他の水を確保することが国家安定の才1条件であつたからである。

この湖もアメリカの援助で水門や水路が整備され豊かな水を付近の田畑へ供給している。広い遺跡を歩き廻り、へとへとになつてSiemreapの町に帰り、グランドホテルの窓からジャングルの上にチョツピリ頭をのぞかせているアンコールワットの中央塔と才3回廊の四つの翼塔を夕暮れの中に見ると、世界の七不思議の一つに数えられるこれらの石の殿堂を訪ね得た満足感と楽しさが疲れを吹き飛ばしてしまうのであつた。

しかしこの驚くべき大事業を、あいつぐ戦乱後の財政的窮迫をかえりみずに、次々と強行したことが、アンコール王朝破滅の原因といわれているのを耳にするにつけ、ものあわれを感じずにはいられなかつた。

あ　と　が　き

本調査団は、英語・仏語および日本語による三つの報告書を作成した。仏語は、カンボジア国においては公用語のようなものであり、英文報告書だけでは読まれない可能性が大きいし、先方からもぜひ仏文報告書を作つて欲しいと依頼されたこともあり、作成したものである。

英文および仏文報告書については、第Ⅰ章から第Ⅳ章までと付録Ⅰ、Ⅱ、Ⅲがその内容であり、第Ⅴ章以下は和文報告書用として書き加え、カンボジア事情を説明したものである。

しかし、本報告書作成中に、既によく御存知のように、カンボジア情勢は大きく変つてしまつた。45年3月18日にシアヌーク殿下追放、ロン・ノル政権成立、4月30日に米軍のカンボジア作戦開始、一方には北京においてシアヌーク殿下による亡命政権が成立するなど、インドシナ半島における果しない戦争は、カンボジアをも巻きこんで、なお拡大しつつある。

従つて、本報告書のカンボジア事情も「昔語り」となり、また電気通信・放送網拡充計画も何時になれば陽の目をみるか解らぬ状態ではあるが、一日も早くこの計画が実施されるような平和が到来することを願うものである。

